

「なすからサロンで地域を見つめ 地域に学び 地域を再発見」

なすからガイドブック



■ ごあいさつ ■

那須烏山市は栃木県東部に位置し、八溝山系や喜連川丘陵に囲まれ、那珂川水系の豊かな清流が数多くみられる自然豊かな街です。460余年の伝統を誇る烏山の山あげ行事や近代化遺産、今も語り継がれる民話をはじめ、歴史と文化が息づく街でもあります。

稔り豊かな大地と豊かな水により、縄文の時代から人々はこの地に暮らし、東山道が通る交通の要所でもありました。那珂川は漁獵だけでなく東北地方と江戸を結ぶ物流の要でもありました。那須烏山市には、山あげ行事以外にも、獅子舞や神楽なども多くの地域で受け継がれてきました。烏山城のほかにも森田や稲積、志鳥など多くの山城跡が残っています。古墳や駅家跡、館跡などの史跡も多数残っています。このように那須烏山市は、どの地区であっても歴史と文化が息づく街なのです。

那須烏山市では公民館講座や那須烏山ジオパーク構想教室などで、地域の自然や歴史、民俗、産業などを題材とした講座や見学会、観察会を数多く開催しています。特に烏山公民館の「なすからサロン」では、それぞれの分野の研究者、専門家を講師としたレベルの高い講座を開催しています。那須烏山市をもっと知る、那須烏山市への愛着をもっと深める、那須烏山市を自慢することができるようになるなどを目指した講座です。この「なすからガイドブック」は、「なすからサロン」での講座内容を各講師にお願いしてまとめたものです。

脈々と受け継がれてきた豊かな自然や歴史、文化を深く知ることで、地元への愛着を深めるとともに、これらを継承していくことの重要性に気づいていただければと思います。また、子どもたちが夢や誇りの持てる街づくりにつながっていただければと思います。

「なすからガイドブック」の製作や公民館講座「なすからサロン」は、「なすからサロンで地域を見つめ 地域に学び 地域を再発見」として、「令和4年度地方創生に向けて“がんばる地域”応援事業」の助成を受けたものです。関係各所の皆様、執筆いただいた講師の皆様に、厚く御礼申し上げます。

那須烏山市教育委員会 教育長 田代和義

目次

I なすから地域自慢アンケート

- I - 1 なすから地域自慢アンケート 3

II なすからの自然

- II - 1 なすからの地史(大地の歴史) 4 酒井豊三郎 宇都宮大学名誉教授
II - 2 なすからの地形 8 青島睦治 栃木県立博物館名誉学芸員
II - 3 なすからの化石 12 柏村勇二 栃木県立博物館名誉学芸員
II - 4 なすからの天然記念物 16 吉川和穂 那須烏山市生涯学習課主事
II - 5 なすからの植物 18 小峯洋一 那須烏山市生涯学習課主幹兼総括
II - 6 なすからの動物 20 小峯洋一 那須烏山市生涯学習課主幹兼総括
II - 7 なすからの景観 22 柏村勇二 栃木県立博物館名誉学芸員

III なすからの歴史

- III - 1 なすからの縄文時代 26 上野修一 なす風土記の丘湯津上資料館長
III - 2 なすからの横穴墓 28 江守浩史 那須烏山市生涯学習課課長補佐
III - 3 古代那須国 30 眞保昌弘 国土舘大学教授
III - 4 なすからの東山道駅路 32 木下 実 日本考古学協会会員
III - 5 長者ヶ平遺跡 34 木下 実 日本考古学協会会員
III - 6 古代八溝の鉄生産 36 鈴木志野 なす風土記の丘湯津上資料館学芸員
III - 7 なすからの城郭遺跡 38 山川千博 大田原市文化振興課学芸員
III - 8 烏山城跡 40 鈴木芳英 那須烏山市生涯学習課学芸員係長
III - 9 烏山と那須氏 42 重藤智彬 那須与一伝承館学芸員
III - 10 那珂川の水運 44 飯塚真史 栃木県立博物館特別研究員
III - 11 なすからの史跡と遺跡 46 石下翔子 那須烏山市生涯学習課学芸員主任

IV なすからの民俗・伝承文芸

- IV - 1 なすからの寺院 48 松本将樹 那須烏山市観光ガイド理事
IV - 2 なすからの神社 50 松本将樹 那須烏山市観光ガイド理事
IV - 3 烏山の山あげ行事 52 柏村祐司 栃木県立博物館名誉学芸員
IV - 4 なすからの獅子舞・神楽 54 常盤祐哉 那須烏山市生涯学習課主事
IV - 5 なすからの伝承文芸 56 木村康夫 那須烏山市文化財保護審議会副会長

V なすからの産業

- V - 1 那珂川の漁労 58 柏村祐司 栃木県立博物館名誉学芸員
V - 2 烏山和紙漉き 60 柏村祐司 栃木県立博物館名誉学芸員
V - 3 なすからの石材 62 柏村勇二 栃木県立博物館名誉学芸員
V - 4 なすからの農業 64 柏村勇二 栃木県立博物館名誉学芸員

VI 那須烏山ジオパーク構想

- VI - 1 那須烏山ジオパーク構想 66 星 康彦 なすからジオの会プッチェーロ代表

- 参考文献 68

I なすから地域自慢アンケート

なすから地域で自慢となるものは何かをアンケート調査した。アンケートは、市内の小学校、中学校、高等学校のご協力を得て、小学校5年生から高校3年生までの全児童・生徒を対象に行った。

アンケートは「那須烏山市では、那須烏山市の魅力を市民の皆さんに再認識してもらったり、外部に発信したりするためのガイドブックを作成します。その資料として、皆さんが考える那須烏山市の魅力（ふるさと自慢）をまとめます。」として、「ある」、「ない」、「わからない」の3択で、「ある」については、具体的名称を記載してもらった。

集計結果は下記表のとおりである。

表：なすから地域自慢アンケート結果集計表

学校別・学年別にアンケート結果をまとめた。小学校児童と中学校および高等学校生徒が「自慢できる」として10%以上が回答したものについては、セルを着色して示した。

	荒川小		江川小		烏山小		境小		七合小		小学校計	南那須中			烏山中			中学校計	烏山高			高校計				
	5年	6年	5年	6年	5年	6年	5年	6年	5年	6年		1年	2年	3年	1年	2年	3年		1年	2年	3年					
アンケート依頼数	39	54	17	37	64	67	14	18	22	27	359	77	65	77	119	109	106	553	137	157	148	442				
回答数	26	27	16	28	44	55	14	16	14	25	265	73.8%	47	53	37	102	91	104	434	78.5%	129	127	140	396	89.6%	
ない	2	2	1	1	0	4	0	0	0	0	10	3.8%	3	4	5	8	7	11	38	8.8%	16	17	10	43	10.9%	
わからない	10	11	4	9	3	24	3	0	4	3	71	26.8%	21	18	16	24	31	45	155	35.7%	75	53	30	158	39.9%	
ある	24	25	15	27	44	51	14	16	14	25	255	96.2%	44	49	32	70	53	48	296	68.2%	38	57	100	195	49.2%	
伝統行事	やまあげ行事	8	8	2	14	39	23	2	15	6	15	132	51.8%	15	18	10	42	49	37	171	57.8%	33	51	86	170	87.2%
	塙の天祭	1		3	1	1				1	7	2.7%	8						8	2.7%				0	0.0%	
	太々神楽									0	0.0%		2						2	0.7%				0	0.0%	
	佐々良獅子舞								4	2	6	2.4%		4	2				6	2.0%	1	1		2	1.0%	
	熊野代々神楽										0	0.0%							2	0.7%				0	0.0%	
	その他祭	1	3	2	1	2		1	4		14	5.5%		1	1	2			4	1.4%	1			1	0.5%	
自然・景観	龍門の滝	8	5	4	9	34	11	1	10	4	14	100	39.2%	8	8	11	16	25	12	80	27.0%	13	6	22	41	21.0%
	オオガネクジラ・化石	3	2	1	4	14				1	1	26	10.2%	9	7	3	2	4	6	31	10.5%	5	1	3	9	4.6%
	ホテル・オオムラサキ	1	1	1	1	6				1	7	33	12.9%			3	3	8	3	17	5.7%	3			3	1.5%
	シモツケコウホネ	1		6	6	1	1			1	1	17	6.7%	8	1	2				2	13	4.4%		3	3	1.5%
	自然	2	2			6	4			6		8	28	11.0%	3	5	5	12	12	37	12.5%	11		13	24	12.3%
	泉溪寺イチョウ											0	0.0%							1	0.3%				0	0.0%
	荒川・那珂川					2				1	2	5	2.0%				5	4	4	13	4.4%				1	0.5%
	花立峠・平群山					1	9	1	1		1	13	5.1%				1	1		2	0.7%				2	1.0%
史跡	烏山城		2	1	4	24	4		2	5	42	16.5%		3		9	10		22	7.4%	6	4		10	5.1%	
	稲積城・根古屋城・森田城	1	1			1	2				5	2.0%				2			2	0.7%		1		1	0.5%	
	遺跡	1	4			2					7	2.7%	1						1	0.3%		1		1	0.5%	
産業	洞窟酒造	4		1	3	13				4	25	9.8%	2	1		4	1	5	13	4.4%	4		5	9	4.6%	
	烏山和紙		2	1	3	26		6	7	1	46	18.0%	2		5	12	9	2	30	10.1%	3	8	20	31	15.9%	
	鮎・やな	1	1	2		17				1	5	27	10.6%				4	2	1	7	2.4%	2	3		5	2.6%
	八溝そば					1					1	0.4%								0	0.0%		1		1	0.5%
	国見のミカン					19		9	5	4	37	14.5%	1						3	1.0%		1		1	0.5%	
	棚田										0	0.0%								0	0.0%			1	1	0.5%
	中山カボチャ	3			1	3			1	1	10	3.9%		1	4	4	3	2	14	4.7%	1		3	4	2.1%	
	その他農産物		2	1		47		1		2	3	56	22.0%	1						1	0.3%		1	1	2	1.0%
神社仏閣・民俗	宮原八幡宮			2		2	1			1	6	2.4%				2			2	0.7%				0	0.0%	
	稲積神社									5	1	6	2.4%				2			2	0.7%				0	0.0%
	解石神社									2	0.8%									0	0.0%				0	0.0%
	八雲神社					2	1			2	5	2.0%				1	1		2	0.7%	3	1		4	2.1%	
	八坂神社							2	4	6	2.4%									0	0.0%				0	0.0%
	熊野神社									0	0.0%						2		2	0.7%				0	0.0%	
	蛇姫神社									0	0.0%		2						2	0.7%				0	0.0%	
	その他神社	1		6		4	2			2	4	19	7.5%	1		1	2	2	1	7	2.4%				0	0.0%
	太平寺・蛇姫	2	1			3				6	12	4.7%				3			3	1.0%		2	3		5	2.6%
	民話	1		1		1		1		2	6	2.4%								0	0.0%	2	2	1	5	2.6%
建造物・他	境橋			1	2	1		1			5	2.0%				1			1	0.3%	1		1	2	1.0%	
	その他橋	1	2	1	3	2					11	4.3%							0	0.0%			1	1	0.5%	
	山あげ会館	1				1					7	2.7%							58	19.6%	1			1	0.5%	
	龍門カフェ・ふるさと民芸館					1				1	2	0.8%	1			3	2	1	7	2.4%		2	1	3	1.5%	
	烏山線・アキユム					10					10	3.9%	1			2			3	1.0%	1		4	5	2.6%	
街並み										0	0.0%								0	0.0%	3			6	3.1%	

那須烏山市内の小中学校および高等学校では、地域素材を取り上げた学習を室内外で行っている。地域を知る、地域に愛着を持つ、地域を誇りに思うなど、地域学習の成果は着実に上がってきている。

はじめに

那須烏山は関東平野の北部、那須地域の南部に位置し、那珂川とその支流が作り出した多様な地形が発達する。北から南に流れる那珂川の東側には八溝山地があり、杉林に覆われた山々が広がる。西側には雑木林の丘陵が北西-南東方向に続き、丘陵と丘陵の間には穏やかに流れる川と水田が広がる。山地も丘陵も全体的になだらかだが、川沿いには急斜面や断崖が発達する。特に那珂川周辺と荒川沿いの高さ20mを超える多くの崖は、本地域の特徴的な景観である。これらの崖の上には平坦地が広がることが多く、段丘地形や扇状地形も見られる。崖の上の平坦地から流れ落ちる滝がみられるのもこの地の特徴である。

那須烏山の大地を形成する地層は、東部の八溝山地で見られる「八溝層群」と呼ばれる中生代の地層群と、西部一帯に広がる新生代の地層群に大別される。

「八溝層群」は、中生代のジュラ紀から白亜紀にかけて、当時のユーラシア大陸の東縁で形成され、新生代の中頃に、大陸から切り離されて現在の位置まで移動してきた。

新生代の地層群は「八溝層群」とそれに繋がる地塊の上に、ほぼ現在の位置で形成された。古い順に、

火山性の岩石を主にした「中川層群」、海成の砂岩や泥岩を主にした「荒川層群」、半固結状態の砂礫層を主とする「喜連川層群(仮称)」に区分される(図1)。

このほか、那珂川とその支流沿いに分布する河岸段丘の砂礫層や現在の河原を作る砂礫層、地域全体を覆って分布する「関東ローム層」(降下火山灰層)などの更新世末期以降の新しい地層群がある。これらは河川の曲流や滝、河岸の崖などの地形的要素や土壌、植生などと共に、現在の地区・地点の景観に差異を与え我々の生活を大きく規制するものになっている。

1) なすから地域の基盤「八溝層群」の形成

■大海原の海底の時代

「八溝層群」が形成された頃、まだ日本列島はなく、現在の那須烏山が位置する辺りには大きな海が広がっていた。深さ数千mの海の底には、海底を作る岩石の上に細かな泥や $1/10$ mm程度の生物の遺骸(放散虫化石など)が少しずつ降り積もった。これが泥岩やチャートになる堆積物で、1cm積もるのに数百年から千年もかかるようなゆっくりした堆積の速度であった。

海底を作る岩石は当時のユーラシア大陸の縁にあった海溝に向かって移動し、そこから大陸を作る

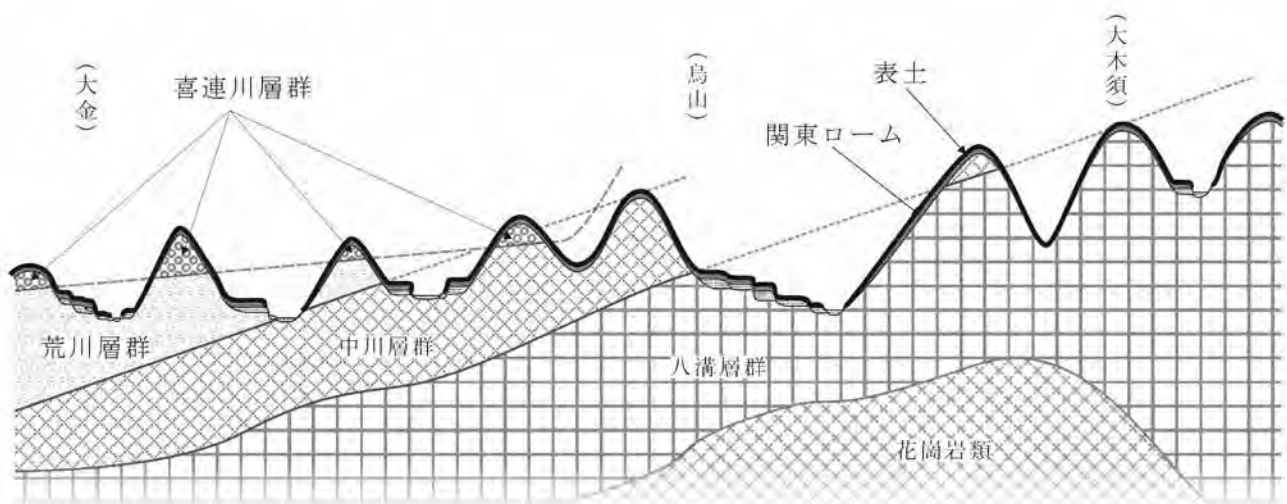


図1 なすから地域の層序概念・断面図

岩石の下へ沈み込んでいた。

沈み込む海底の岩石の上に乗っていた堆積物は、十分に固まっていないために岩石と一緒に沈み込まず、曲げられ折り畳まれながら陸側の縁に集められていった(これを付加体と呼ぶ)。そこには陸側からも泥や砂が運ばれ、大量の堆積物が積み重なった地層群が形成される。これらは海側から押し続け、褶曲や断層を伴いながら上へ上へと押し上げられ、硬い岩石の地層群となって海面上に顔を出すことになる。

八溝山地一帯に分布する砂岩や泥岩、チャートなどからなる八溝層群は、このようにしてできたと考えている。

この考えを支持する証拠には以下の様なものがある。

チャートやそれに隣接する泥岩には、他の地域と同様に、波長数mから十m程度の折りたたまれたような激しい褶曲が見られる(図2)。厚さ数cmのチャート層1枚1枚は破壊されず、比較的保存の良い放散虫化石が含まれる。チャートが強く変形するには、固結する前の柔らかい状態か、岩石が柔らかくなるほどの高温高压の状態ではなければならない。高温高压の状態では放散虫化石は痕跡すら残らない。したがって、岩石化する前に変形した堆積物、すなわち付加体の構成物であると判断される。

チャートの近くに広がる粗粒の砂岩層や砂岩泥岩互層には、極度の変形は見られない。これらは付加体の上に堆積した地層であると考えられる。

チャートの中にはマンガン濃集部を伴うものがあり、かつてはこれをマンガン鉱として採鉱していた。この類のマンガン鉱床は遠洋の堆積速度の遅い海底



図2 チャートの露頭(川戸地区)

環境で形成されたと考えられている。

■大陸の時代

付加堆積物による新しい陸地は、前からあった陸地の海側に付け加わり、山脈を作りながら大陸域を広げる。時間の経過とともに山脈は、風化し削られ、緩やかな山や谷あるいは大平原なども造られたであろう。

白亜紀の中頃に、大陸の地下で多量の花崗岩質マグマが形成されるという地質学的な大事件があった。「八溝層群」はこのマグマに接触する位置に分布していたため、一部は溶けてマグマと同化した。マグマに隣接した砂岩や泥岩、チャートなどは、熱で変成岩(熱変成岩=接触変成岩)に変わった。

このマグマは地下深くで冷却し花崗岩となった。旧馬頭町北部から旧黒羽町東部にかけて広く露出している。隣接する八溝層群の地層は、大きく成長した変成鉱物(変成作用でできた鉱物)を伴う熱変成岩に変わっている。なすから地域では花崗岩を見ることはできないが、那珂川沿いの露頭では弱いながら熱の影響を受けた泥岩が見られる。舟戸にあるチャートの放散虫化石は、放散虫化石であると確認するのが困難なほど熱の影響を受けている。この変成の程度を、馬頭・黒羽地域の花崗岩と変成岩の位置関係から推定すると、那珂川河床の地下200~300mに花崗岩が分布すると考えられる。

花崗岩は地下数kmでできる岩石である。これが地下200~300mにあるということは、八溝層群とその上にあつた地層の大部分が削り取られたことになる。

恐竜やアンモナイトなど多くの生物が絶滅した白亜紀末の地球生命史上の大事件が起きたのは「八溝層群」が大陸の一部であつた時代の出来事だが、なすから地域にはこれに関する記録(地層)はない。

■大陸地塊の分裂・移動と日本海の誕生

古第三紀の終わり頃、ユーラシア大陸の東の端で大地殻変動が起きた。大地が裂け、それがどんどん広がり、海水が流入し海となった。日本海の誕生である。

裂けて反時計回りに回転しながら東へ動いた大陸の一部(地塊)が現在の東北日本、時計回りに回転

しながら南へ動いたものが西南日本となり、日本列島の基本的な形がつけられたとされている。これは、日本各地の白亜紀から古第三紀の岩石に残された地磁気(残留磁気)から求めた磁北の方位が、東北日本では現在よりも西へ40度ほど、西南日本では東へ30度ほどずれていることから導き出されたものである。

「八溝層群」は東へ動いた地塊の南端付近に位置し、その上に重なる中川層群の残留磁気を示す磁北の方位は現在と同じである。中川層群が形成された時期(約1,800万年前)には、地塊の動きは止まっていたと考えられる。中川層群の残留磁気は、日本海の基本的な形が出来上がった時期を1,800万年前頃とする根拠の一つになっている。

2) 「日本列島の世界」のなすから地域

■火山の時代・・・「中川層群」の形成

日本列島のもとが出来た頃、海溝も現在と同じ位置になった。新しい海溝でのプレートの沈み込みに伴い、新しい火山活動が始まった。那須烏山・茂木地域から福島県東部、宮城県東部にかけて分布する溶岩や火山噴出物が、最も海溝寄りの火山活動の記録である。

この火山活動が始まった頃、なすから地域の大半は海辺に隣接する緩やかな起伏のある陸地で、あちこちに湿地が広がっていた。湿地には植物の遺骸が溜まり石炭となった。昭和の時代には亜炭(低品位の石炭)として採掘されていた。多数の植物のほか昆虫の化石も見つかっている。砂岩・泥岩を主体とし、亜炭や礫岩を伴うこの地層群を「元古沢層」と呼んでいる。

やがて火山活動が活発になり、多数の溶岩流を伴う多量の火山砕屑物が堆積した。この火山噴出物は、那須烏山の東南部から茂木にかけて広く分布するほか、那珂川町との境界付近の那珂川沿いでみられる。那須烏山・茂木地域では溶岩の割合が南西に向かって大きく、茨城県側は火砕岩が主体で溶岩が少ないことから、火山の中心は茂木町の中西部にあったと考えられる。この火山を「茂木火山群」(仮称)と呼ぶ。火山活動に伴う土石流が海底に堆積した様子も見られ、火山群の麓が海に繋がっていたと考えられる。

火山砕屑岩と溶岩からなるこの地層群を「山内層」と呼んでいる。

この後に、多量の軽石を噴出する活動があったが、なすから地域では削剥されてほとんど残っていない。茂木地域では、この活動で形成された軽石火山礫凝灰岩(いわゆる「軽石凝灰岩」)が残り、「茂木石」と呼ばれる。この前後に堆積した砂岩や凝灰岩、礫岩と合わせて「茂木層」とよんでいる。

「中川層群」はこの元古沢層、山内層、茂木層をまとめて呼ぶときの名称である。

■火山削剥の時代

「茂木火山群」の活動が終った頃、多くの断層を伴う地殻変動が起き、なすから地域は隆起した。隆起は北ほど激しく、「茂木火山群」は南に傾き、大きく削られなだらかな凹凸のある地形になったと考えている。

■海の時代・・・「荒川層群」の形成

中新世中期に、日本列島のほぼ全域で急激な沈降が起きた。栃木県は足尾山地と八溝山地の一部が島として残ったほかは、海の底に沈んだ。この海の底で、なすから地域に分布する「荒川層群」が形成された。堆積の始まりの時期は約1,500万年前である。

「荒川層群」の海の記録は、よく円磨された礫からなる薄い礫岩層から始まる。この礫岩の上に砂岩と泥岩が積み重なるが、初期の頃(地層の下位の部分)は地域により、層の厚さや重なり方に差がある。砂岩は粗粒の火山灰か石灰質の化石の破片であることが多く、河川や海岸で円磨された岩石由来の砂の粒子はほとんどない。また、海底付近を流れる海流の影響を受けた堆積物も頻繁にみられる。

これらのことから、なすから地域が大きな河川の河口から離れた、岩礁を伴う幅狭い海浜が続く海であったこと、付近に降り積もった火山灰と浜辺や岩礁に生育した貝などの遺骸が波に洗われて移動し堆積する浅い海であったことが推察される。

その後、水深が増すとともに次第に地域差は少なくなり、砂岩層は減少し、細粒の泥質の層が増加する。

最下位の礫岩層から始まる砂質の堆積岩を主とする地層群を「小埜層」と呼び、層厚は約200mである。

小埧層の上限付近が堆積したのは約1,200万年前である。この頃には海底の沈降は収まり、その後の海は、泥や砂で少しずつ埋められ浅くなっていった。

小埧層の上に重なる泥質岩を主とする地層群を「大金層」と呼ぶ。層厚は約300mである。大金層の中・上部には、軽石を含む厚い砂の層が挟まれようになる。この砂は、現在の陸棚の端に相当する浅い場所の堆積物が何らかの原因（おそらく巨大な火山活動がきっかけ）で崩れ落ち、深海底に広がったものであろう。

1,000万年前頃からは、多数の珪藻化石を含む珪藻質泥岩（“珪藻土”と呼ばれる）が堆積するようになる。この地層群を「田野倉層」と呼び、厚さは約200mである。

田野倉層上部には浅海域から流れ込んだとみられる火山灰や砂の層が見られ、その後には泥質の砂岩が堆積するようになる。この泥質砂岩を主とする地層群を「入江野層」と呼ぶ。なすから地域では本層の上部は削剥され残っておらず、下部の厚さ約50mが確認されるだけで、その年代は約900万年前とされている。

■大削剥の時代・・・“磐那毛川”の成立

その後800万年前頃から300万年前にかけて数度の隆起・沈降があったと想定されるが、栃木県内では詳細を論じられる情報は得られていない。

この間に栃木県は全体として隆起し陸になったが、東西両側に比べ中央部の隆起量は少なかった。なすから地域では東側ほど大きく隆起したため、地層は西に傾き、隆起に伴う浸食量は、東の烏山付近では1,000m以上、西の三箇周辺でも数百m以上と見積もられる。

この隆起と浸食によって、北は福島県南部から那須野が原西部、氏家・喜連川間を通り、真岡の西部を経て、関東平野中央部から房総・銚子方面に繋がる谷地形が作られた。この谷地を流れた大河を“磐那毛川”と呼ぶことにする。

■大河埋積の時代・・・「喜連川層群」の形成

約250万年前、再度、沈降が始まった。“磐那毛川”の下流に当たる銚子付近では、白亜紀や中新世の地層の上に新しい海の堆積物が溜まり始めた。中流

部に位置するなすから地域では、東部の山岳地帯からの砂礫が、支流を経て下流へ移動するという状況にあった。

沈降が進むと、なすから地域にも砂礫層が堆積し始める。“磐那毛川”とその支流によって堆積した砂礫を主体とする地層群が「喜連川層群」である。

地域の北部、志鳥や中山付近では30mを越える厚さの礫層が確認されている。「喜連川層群」の礫層は強く風化しており、安山岩やデイサイトの礫が竹べらで削ることができるほどである。

やがて“磐那毛川”の中・上流域は隆起に転じ、川沿いに「喜連川層群」を削り込んで河岸段丘が形成される。その段丘上には50mから30m程の火山灰層（関東ローム層）が重なる。段丘は矢板から喜連川、鴻野山、曲畑にかけて分布しているが、段数や広がり詳細についてはほとんどわかっていない。

■那珂川の時代・・・那珂川の成立から現在へ

40万年前頃に日光・高原・那須で火山活動が始まり、“磐那毛川”の西側の隆起も激しくなり、川には多量の碎屑物が供給されるようになった。那須地域の“磐那毛川”は西からの碎屑物の供給の増加に伴い、次第に東へ移動した。やがて八溝山地の西側を南流する旧那珂川と繋がり、現在の那珂川の基本形が出来上がった。およそ25万から30万年前と考えている。

那珂川流域の河川は10万年ほど前には、現在とほぼ同じ流路をとるようになった。ただし、この頃那珂川や荒川は現在の河床より30m以上、江川の滝より上流では10m以上、現在よりも高い位置が河床であった。その後、那珂川とその支流では下刻（流水による河床の削り込み＝下方浸食）が続き現在に至っている。

約5万年前と約3万年前に、下刻が停滞した時期があった。この時期に那珂川流域の各河川で、広い河原が形成された。この河原は各河川の川沿いに広がる平坦面を持つ台地となっている。烏山の金井付近や谷浅見の平坦面が前者の面であり、烏山の旭二丁目、興野、大金の面が後者の面である。

時代が異なり、岩質も異なる2つの地層群が東西に分かれ分布することが、那珂川をはさんでの東西の地形の差の基となり、なすから地域を特徴付けている。

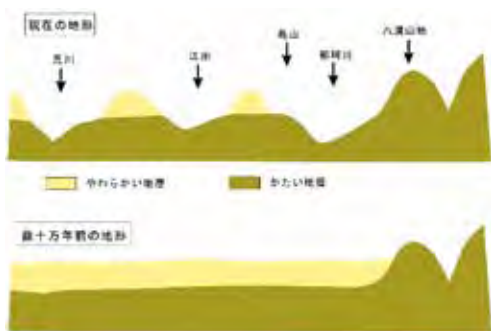
【那須烏山の地形の概要】

地形は一般的に起伏の大小や平坦面と斜面の割合などによって、山地、丘陵、台地、平野等に区分される。那須烏山は東側の低い山地（八溝山地の一部）と西側の丘陵（喜連川丘陵の一部）からなり、これらの中を那珂川やその支流が流れている。川沿いには低地や台地（河成段丘）が分布する。

地質的には山地は古くて（中生代～中新世）かたい（固結した）地層からなる。丘陵の表層部は新しい（更新世）やわらかい（未固結の）地層からなるが、その下には古い、かたい地層があり、河床などに露出している。

日本列島の地形の大枠は地殻変動（プレート運動）と火山活動によって作られたと言えるが、那須烏山の地域的な地形に限って言えば、それらは川の侵食作用によって作られたものである。

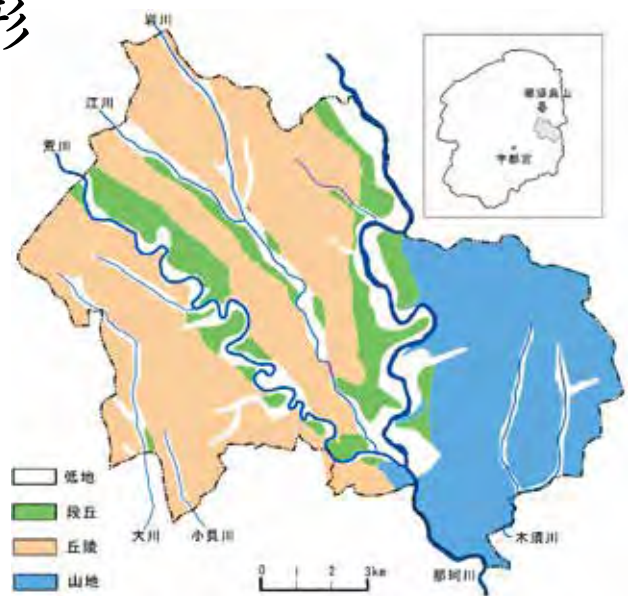
ところで、那須烏山の山地と丘陵ではたどってきた歴史が大きく異なっている。今から数十万年前の丘陵域には、現在の那珂川水系とは異なった河川によって運ばれた砂礫からなる平地が広がっていた。そこに現在の那珂川などが流れるようになり、河川の侵食が継続することによって丘陵と河成段丘と低地からなる地形が作られていった。一方、山地はこれ以前からずっと山地であったと考えられる。周辺が海になっていた時代もこの地域は陸のままであり、ずっと風化や侵食作用にさらされてきたと考えられる。



現在と数十万年前の地形

【川の侵食作用】

川による侵食作用について考えよう。丘陵の中



那須烏山の地形区分

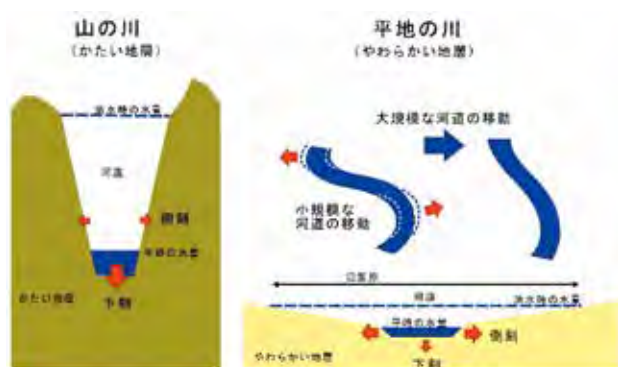
を流れる川の横断面を見ると、最も低くなった部分が河道で通常時の水の通り道である。河道に隣り合って少し高くなった平坦面は、洪水時には水に覆われる部分で氾濫原と呼ばれる。氾濫原の外側にはさらに高く、通常何段かに分かれた平坦面がある。この平坦面はかつての川の氾濫原で、高い面ほど古い時代のものであると考えられ、段丘と呼ばれる。段丘と丘陵の間は急～緩傾斜の斜面であり、丘陵の頂部にはやや平坦な面があるのが普通である。このような川の谷の形は侵食の歴史を端的に物語っているとと言える。

川の侵食作用は水量や水深、水流の速さ、水の運ぶ岩や礫、砂粒などの物性等に左右され、他方侵食を受ける側の岩石や地層の硬さ、その他の性質にも影響される。このように多くの要因が絡む中で、地層のかたさについては直観的に理解しやすいと思われるので、今後地層のかたさと侵食作用との関連に重点を置いて述べていくことにする。

やわらかい地層からなる平地の上を流れる川は蛇行しやすい。つまり、川が湾曲した部分の外側では侵食が起こりやすく、内側では堆積が起こりやすいため、河道は外に広がっていく。また、崩れやすい堆積層からなるため、河道が深く彫り込まれることはなく、洪水時には水は周辺に拡がり、広い範囲で水底を削る。氾濫原が広く、通常時の河道と周りの高さがあまり変わらないため、洪水後

に流路が元に戻らず、大きく位置を変えることもあり得るだろう。このようにやわらかい地層からなる平地を流れる川は、広い範囲で侵食作用を行う傾向があり、広い谷を形成する。谷を深く削っていくような侵食作用を下刻、横に広げるような侵食作用を側刻と呼んでいるが、ここでは下刻よりも側刻が目立っているとも言える。

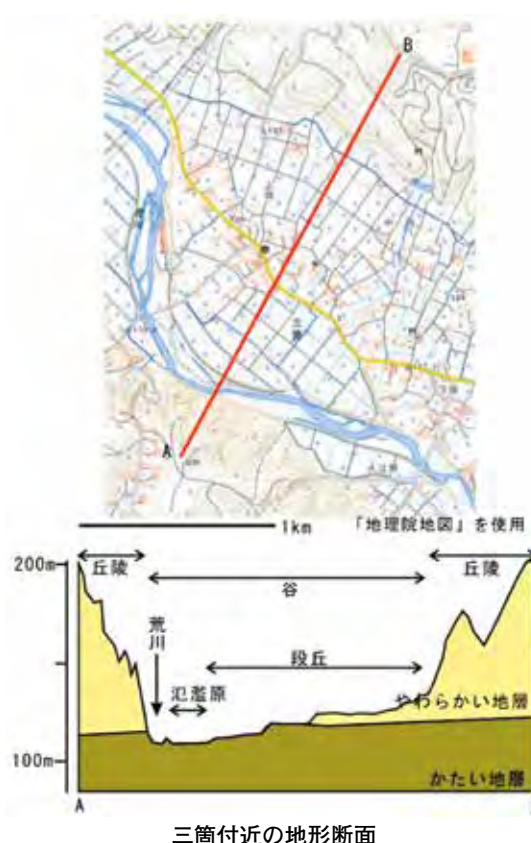
一方、かたい地層の上を流れる川の場合、河道の変化は起こりにくい。しかしながら、水流が同じ場所を継続的に削ることになるため下刻作用はむしろ活発になる場合もある。かたい地層は崩れにくいので河道は深く削り込まれることになる。このため、洪水時に河道の外に溢れる水の量が減少し、氾濫原はやわらかい地層の上を流れる場合よりも狭くなる傾向があると考えられる。



かたい地層とやわらかい地層を流れる川

【荒川における侵食地形】

図は三箇付近における荒川の谷の断面図である。縦横比は10：1で垂直方向に誇張されている。荒川河床の標高はおよそ110mである。また、左岸および右岸（川下に向かって左側が左岸）側の丘陵の高度は200mを少し超える程度である。荒川の河床および右岸の丘陵の基部には荒川層群と呼ばれるかたい地層が広く露出している。同じ地層は左岸の段丘崖にも部分的に露出している。荒川層群は全体的に見て南北方向に向き、西側にゆるく傾斜しているとされるので、この断面の下部には荒川層群が分布していると考えられる。この上を礫や砂、泥からなる境林層が覆っている。境林層の層厚はこの付近で50～80m程度である。



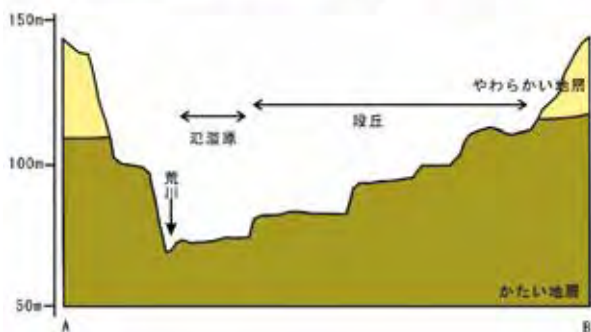
三箇付近の地形断面

荒川の右岸は丘陵の斜面に接しており、基部は侵食崖となっている。左岸側は幅300mほどの氾濫原があり、さらに丘陵斜面との間の幅1100mほどはほぼ平坦な面が広がり、高さ数mの崖を境に3段に分かれているように見える。

以上のような観察からこの地域の地史をたどってみよう。数十万年前、砂礫や泥からなる平地を荒川の前身が流れ始めた。川は蛇行し、時に大きく流路を変えることもあったため、氾濫原は広がり、この範囲で侵食が進行し、しだいに谷が形成され、削り残された部分は丘陵化していった。厚さ数十mほどのやわらかい砂礫層が侵食され、その下のかたい地層（この地域では荒川層群）に達すると、侵食の様式が一変した。河道が変動しにくくなり、下刻が狭い範囲に集中するようになった結果、川は従来よりも深く彫り込まれた谷底を流れるようになった。また、洪水時に水があふれる範囲も狭くなったため、従来の氾濫原の一部は川による侵食を受けなくなり（この状態を離水という）、段丘化していった。

【穿入蛇行】

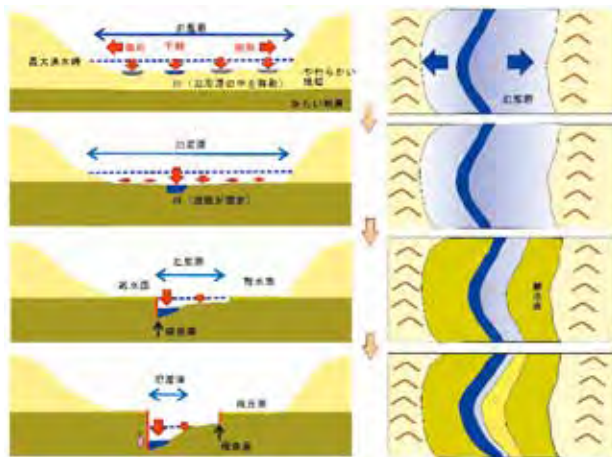
川が川底を深く削り込みながら蛇行している状態を指す。山地などでかたい岩盤が出ている地域を流れる川が深い谷を作るのは普通であるが、これらが蛇行していることは稀である。逆にやわらかい堆積層からなる平坦な地域を流れる川が蛇行することは珍しくないが、これらが深い谷を作ることはない。荒川に見られるような穿入蛇行は珍しい例であり、この地域を代表する地形と言える。栃木県の自然環境保全地域にも指定されている小埜地域について取り上げてみよう。



小埜付近の地形断面

この地域で荒川は鎌瀬倉付近から小埜駅周辺、さらに森田宿南側まで大きく曲流を繰り返し、連続的に侵食崖を作っている。図は小埜駅南側を通る断面であるが、荒川河床の標高は70mほどで、右岸の大里付近の標高95~100mに位置する狭い段丘面との間は荒川層群からなる断崖となっている。荒川層群はさらに高い丘陵の基部にまで露出している。左岸側の幅250mほどは河道部分よりやや高い氾濫原が広がる。さらに外側には1kmほどにわたって3~4段の段丘地形が認められる。段丘崖には荒川層群が現れている所もあり、

周辺の地質の分布状況から考えて、標高110~120mまで分布しているものと判断できる。このような断面から想定される地史は、やわらかい砂礫層（境林層）を侵食してきた荒川は氾濫原の中を大きく蛇行を繰り返して流れていた。かたい荒川層群を削るようになると河道が移動しにくくなるため直前の蛇行した形態がそのまま維持されることになった。荒川の河道の右岸にある高さ25mほどの断崖は、河道が位置を変えないまま下刻が継続したため形成されたものである。断崖の上の段丘面が2万~3万年前に作られたものと仮定すると、1年におよそ1mmの速度で侵食が進んだことになるが、これは非常に速い速度であると言える。荒川において河道に接して侵食崖が発達している場所はすべて曲流した外側の部分である。川の中でも最も侵食作用が活発な部分で継続して下刻が行われたことが侵食崖の成因であろう。一方、侵食崖の反対側（曲流の内側）は一般になだらかな斜面か数段の段丘が形成されている。洪水時水はもっぱらこちらの側に溢れるが、谷が深くなるにつれて水が到達する高さも低くなるので、このような地形が形成されるのであろう。



穿入蛇行地形の形成

【滝】

那須烏山地域には規模はさほどでもないが、多くの滝が存在する。これらはそれぞれの地質や地形の条件に基づいて成立したものである。代表的な例として、龍門の滝を取り上げてみよう。龍門の滝は江川の下流（荒川合流点から約3km上流）にある落差12mほどの滝である。滝の上流では江

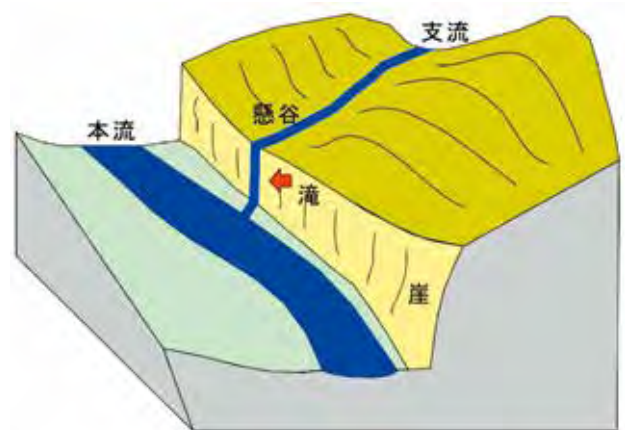
川は丘陵の間を幅1km弱の谷を作って流れており、両側に小規模な段丘が発達する。一方、滝の下流には深く狭い谷が1km以上にわたって続いている。この谷は段丘面の続き具合から見て、烏山市街地の周りにある段丘崖と同じ時代に作られたものと考えられる。地質的にみると、滝の下流には砂岩や泥岩からなる八溝層群が分布している。これらは強い風化作用を受け、砂岩はブロック状に割れ、泥岩は粘土化していることがある。滝の部分には中川層群の凝灰角礫岩、火山角礫岩、凝灰岩などが分布している。さらに上流には荒川層群の砂岩や凝灰岩などが見られる。以上のような地形、地質から見て、龍門の滝の成立は段丘面の形成以後で、上流部と下流部の下刻の速度の違いに起因すると説明できる。すなわち滝の下流域では風化された八溝層群の下刻が速やかに進行したのに対して、滝の部分では中川層群の火砕岩類の侵食が進まず、段差が生じていったと考えられる。烏山市街地北方にある滝田の大滝も同様な成因を持つ滝である。しかしながら、那珂川や荒川にも同様な地質分布が見られる場所があるが、滝は生じていない。これは那珂川や荒川が江川より大きな川で、水流や運搬している砂礫の量が大きく、侵食力が強かったため、硬い火砕岩類も削ることができたためかもしれない。



栄出の滝は田野倉と小倉の境で荒川が大きく蛇行している所に、支流の長者川が流れ込んで形成されている。侵食崖自体は小埸付近と同様に荒川の下刻によって生じたものである。長者川は荒川に較べて侵食力が小さいために合流点に段差ができたと思われ、このようなタイプを懸谷と呼んでいる。



龍門の滝付近の江川の縦断面



懸谷の滝

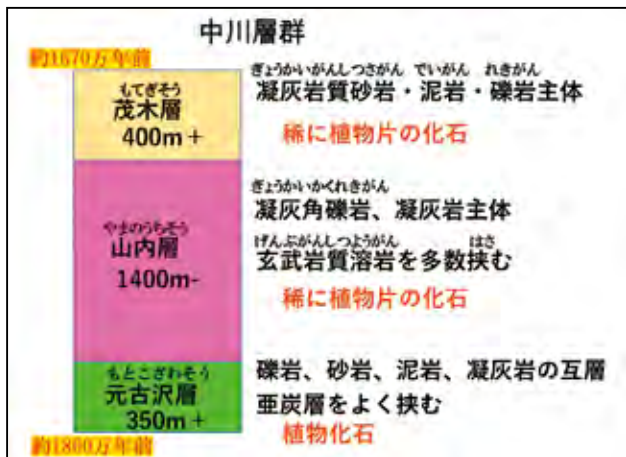
3

なすからの化石

なすから地域の大地は、中生代の八溝層群、新生代中新世前期の中川層群、中新世中期～後期の荒川層群、新生代更新世の喜連川層群から構成されている。

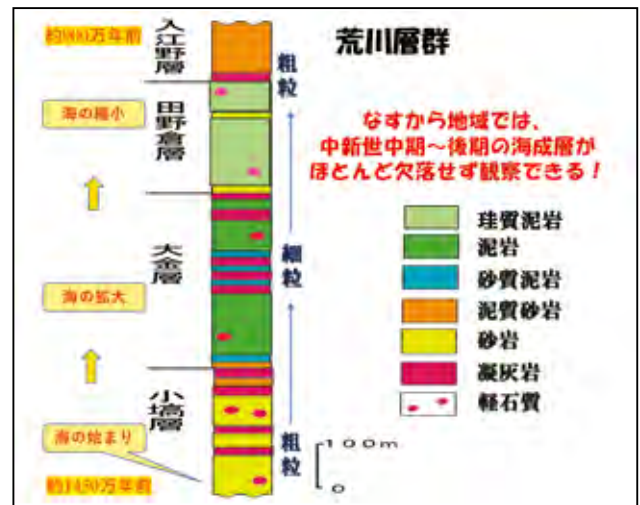
八溝層群は海洋プレートが沈み込む際に、その上に載って長い時間をかけはるばる運ばれてきた堆積物が、大陸側のプレートに押し付けられた付加堆積物を主体としている。主に珪質の殻をもつプランクトンが降り積もってできたチャートである。肉眼で見える大きさの化石は極めて稀である。

中川層群は、陸で形成された地層で、火成岩類を主体としている。元古沢層の中には、泥岩からなる湖沼堆積物も含まれ、植物化石をよく含む。大量の植物遺骸により形成された亜炭層もある。



中川層群元古沢層の植物化石と昆虫化石(右下)

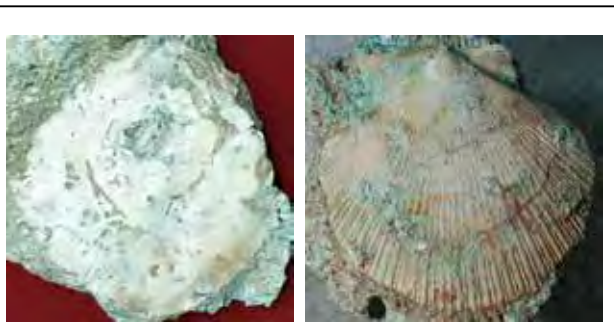
荒川層群は、海の始まりから拡大、縮小まで一連の堆積物から形成された地層である。貝類化石が多産するほか、魚類やクジラ類、ウニ、植物なども産する。珪藻や有孔虫、放散虫などの微化石も豊富に産する。荒川層群の地層や化石などについて、多くの研究者が調査を行ってきた。環境変化に伴う生物相の変化や種の消長に基づく生層序の確立などが研究されてきた。



なすから地域の貝類化石は、海進・海退による、海の深さや水温などの変化に起因する変化と、場所による海の深さの違いによる変化が確認できる。

海に沈み始めた頃は、暖流系の種が産出する。海が深くなっていくと、冷温系の種が産出し始める。この冷温系の種も、小埜層中部～上部では浅海性だが、大金層では沖合の深い海への種へと移り変わる。田野倉層は、水の動きが弱い内湾的な環境下の地層で、特異な種が主体となる。海退が進んだ入江野層では、浅海性の種が産出する。

荒川層群は、西にゆるく傾斜しながら陸化し、その後、浸食を受けた。地表でみられる地層は、地域により同じであったり、異なったりする。例えば、大金層中部の貝類化石層は曲田、大里、高瀬、熊田などでみられるが、産出する貝類化石の種類が異なったり、同種でも産出数が異なったりする。曲田や大里では浅海性の種が含まれるが、高瀬～熊田には含まれない。なすから地域の当時の海は北に向かって深くなっていったようである。

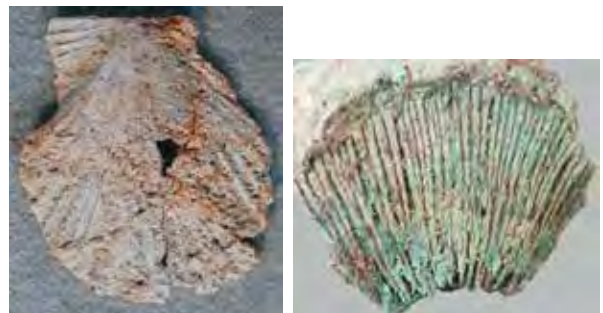


イタボカキ

ナトリホソスジホタテ



イワムラニシキ (左:左殻 右:右殻)



アラカワニシキ

サンゴ

小埧層最下部の主な暖流系種の貝類とサンゴの化石



ムカシチサラガイ (左:外側 右:内側)

小埧層下部で、暖流系種に代わり最初に産出する冷温系種である。小埧層中～上部で多産する。なすから地域は、ムカシチサラガイの国内最大の産地である。

なすから地域での海進当初の暖流系種から冷温系種への移り変わりは顕著である。海の始まりを示す不整合面の直上から約20mに渡り、暖流系種の貝類化石が産出する。これより上位約15mは、貝類化石の産出を確認できない。再び貝類化石が産出し始めるが、いずれも冷温系種である。この群集の移り変わりが、森田の荒川左岸の崖で確認できる。連続した露頭でみられるのはとても貴重であり、極めて稀なものである。



那須烏山市森田の荒川左岸の崖



ヨコヤマサリツノガイ



オオタニエビスガイ



ヤバイトカケガイ



クズヤガイ



スカシガイ



ベッコウカキ

小埧層中～上部の主な貝類化石



シオガマルフミガイ



シマキンギョガイ



ニノヘサルボウ



オオキララガイ



イシカゲガイ



オオツキガイモドキ



ダイオウシラトリガイ



オオノガイ



イタボカキ



ツノオリレガイ



コロモガワエゾボラ

大金属層の主な貝類化石



大金属層中部の貝化石密集層



トクナガキヌタレガイ

荒川層群では田野倉層に限り産出する。硫化物^{りゅうかぶつ}を分解する際に出るエネルギーで有機物を合成する、^{いおう}硫黄バクテリアと共生する種である。このため、栄養分に乏しい海でも生息できる。荒川層群全体を通して産出するオオツキガイモドキも、同様の生活をする。



イズモユキノアシタガイ



ゲンロクソデガイ



ベッコウキララガイ



オチアイマルフミガイ



アキタクルミガイ

田野倉層上部～入江野層の主な貝類化石



ウニのとげ

フジツボ

カイメン

魚類のウロコ

サメの歯

巣穴化石

カニの巣穴

荒川層群のいろいろな化石

- ウニ：殻^{から}の化石とトゲの化石が産出する。
- フジツボ：岩場^{がんじょう}に頑丈^{たいせい}に張り付いて生活しており、殻も頑丈^{たいせい}で貝類とよく間違われる。エビやカニと同じ甲殻類^{こうかくるい}に分類される。身の味はエビ、カニそのもの。
- カイメン：殻も骨もなく、ほとんど水分なので化石に残らないと思われがちだが、体の中には体制^{たいせい}を維持するため、細かいガラス質の針^{こっしん}（骨針）が放射状に並ぶ。写真の化石は、カイメンの横断面である。
- サメの歯：サメ類は軟骨魚類で、骨が化石に残ることは稀^{まれ}である。エナメル質^{えなまるとし}の歯^{がんじょう}は頑丈^{たいせい}で残りやすい。
- 巣穴化石：巣の周り^{たいせきぶつ}と後から巣穴に入り込んだ堆積物の種類が違^{ちが}うと、巣穴の形が化石として残る。巣穴は砂、周りは細かい火山灰である。



荒川層群の植物化石



オオガネクジラ

1979年に高瀬大橋の建設作業中に発見された。県内初のまとまったクジラ類の化石の発見であった。頭蓋^{とうがい}や鼓室胞^{こしつほう}（耳の骨の一つ）など、種の同定に必要な部位は発見されなかった。ヒゲクジラ^{ひげくじら}の一種として、栃木県立博物館で常設展示されている。「オオガネクジラ」は、学名ではなく俗称である。



ききやくるい
鰭脚類の化石

アシカやオットセイなどの仲間の化石がまとまって産出した。首周辺^{くびりゅう}の骨と肋骨^{ろっこつ}である。オオガネクジラ同様に、種を決定付ける部位は含まれなかった。

荒川層群の化石画像提供：栃木県立博物館

4

なすからの天然記念物

天然記念物とは、学術的価値や鑑賞上の価値が高い動植物や地質鉱物などについて、文化財保護法に基づき国、県、市町村が指定したものである。現在那須烏山市内には、植物を中心に県指定1件、市指定17件の天然記念物が登録されている。指定文化財として登録することは、その保存や活用のための必要な措置を講ずることを目的としている。

ぼだいくぼ
【菩提久保のボダイジュ】 県指定記念物



指定年月日：平成7年8月22日
形状・寸法：樹齢推定250年
樹高 約23m、根回り 約6.1m、目通り 約6.5m
このボダイジュは、幹が3つに分枝した大木に見えるが実際は3本の木が根元で結合している。6月ごろには、白い花を枝一面に咲かせる様子が見られる。この幹の太さと樹高から、栃木県の天然記念物に指定された。ボダイジュとは、中国原産のシナノキ科の落葉高木である。釈迦しやくかがその木の下で亡くなったと伝わるインドボダイジュはクワ科の樹木で別の種類である。ボダイジュは果実が球状で、数珠じゆずを作る材料になることから寺院の庭などに多く見られる。菩提久保のボダイジュも阿吽あぐり苦離地蔵堂の境内に植えられている。「菩提久保」という地名は、このボダイジュにちなんでつけられたものと言われている。

【太平寺のカヤ】 市指定記念物

滝地区にある太平寺は、その門や本堂をはじめ、彫刻や工芸品などの県指定、市指定の有形文化財も所有している。境内には様々な樹木が植えられており、そのなかでもカヤの木は市指定の天然記念物になっている。



指定年月日：昭和37年3月8日

形状・寸法：樹齢推定200年

樹高 約25m、目通り 約5.45m

太平寺本堂の北側にはかつての烏山藩主の一族や、家老などの上級武士が埋葬された特別な墓域が設けられており、その境界木として植えられたと考えられている。古記録から、この地域には一般庶民の埋葬は認められなかったことがわかっている。

にしやまたつかいどう
【西山辰街道の大桜】 市指定記念物

八ヶ代地区と高根沢町との境界の高台にあり、すぐ側を古道（辰街道）が通っている。木の根元には「桜観音」と呼ばれる観音様が祀られており、

古くからこの道を行き交う人々の憩いの場になっていたと思われる。

その昔、源義家が奥州征伐に赴く時に、この道を通り兵馬を休ませ、その際に持っていた桜の鞭を地面に挿したところやがて根付いてこの桜に成長した、という言い伝えがあることから別名「義家桜」と呼ばれている。

例年、4月上旬ごろに見ごろを迎える。



指定年月日：平成4年6月24日

形状・寸法：樹齢推定350年

樹高 約14m、目通り 約5.3m

いなづみじょうし しそう
【稲積城址の祠叢】市指定記念物



指定年月日：平成26年6月23日

形状・寸法：樹高 約22m、

樹冠 東西 約30m 南北 約22m

敷地面積 約53㎡

現在、稲積神社の残る稲積城址のあった高台

に、小さな^{ほこら}祠がある。この祠は大きなイロハモミジの根元にあり、祠と木を囲むように大小さまざまな針葉樹、広葉樹を含む7科8種、約24本の樹木がまるで1本の木であるかのように生い茂っている。

これほどの小面積に高木群が密生しているにもかかわらず枯れずに生長している様子は学術的に貴重であるため、市指定の天然記念物に登録された。

なお、「祠叢」という用語は造語で、神社の森林が「社叢」ということから、祠のまわりの^{くさむら}叢(林)の意味で名づけられた。

【国見大久保のユコウ】市指定記念物

国見地区は、観光みかん園があり、みかん栽培が盛んな地域である。みかん栽培といえば温暖な地域での栽培が多いが、この地域は冬でも霜が降りにくい^{むそう}無霜地域であることを利用し、栽培が行われてきたと考えられる。



指定年月日：平成26年6月23日

形状・寸法：樹齢推定250年

樹高 約6m、枝張り 東西 約6m 南北 約6.4m

ユコウ(柚柑)は、柚と蜜柑^{みかん}の自然交雑種と推定されている^{かんきつ類}柑橘類で、古くから徳島県や高知県で栽培されている。

現在の所有者から数えて9代前の当主が金比羅・八十八カ所参りの際に四国から種子を持ち帰り、^{ぼんしゆ}播種したものを現当主の曾祖父が分家する際に現在の地に移植したと伝えられている。樹齢が古く貴重であることから、市の天然記念物に指定されている。

那須烏山市は、現在、年平均気温13℃前後で、冷温帯と暖温帯の移行帯である中間温帯の気候だが、氷河期以降の過去の気候変動により分布を広げた冷温帯や暖温帯に多い植物も見られる。

植物の内、維管束植物（シダ植物と種子植物）を取り上げ、環境ごとに記載する。

(1) 丘陵部の植物



荒川左岸丘陵の尾根には、アカマツ林が見られ、通常中腹に生育するブナ、イヌブナが生育する林がある。

中腹には、様々な植物が生育する雑木林（伐採、萌芽再生を繰り返してきた林。モミ林やアカシゲ林、アラカシやウラジロガシ等のカシ林もある。）、コナラ・クヌギの植林等がある。



【ブナ（ブナ科）】

かつては薪や炭を生産するため、伐採と萌芽再生を繰り返したため、株立ちとなった雑木林。その中に生育していたため、ブナも株立ちとなって生き残ってきた。



【株立ちの木が見られる雑木林】

手入れをしなくなったため、アズマネザサが茂り、藪状態になった林が多い。



【烏山城跡のイワヘゴ（オシダ科）】

烏山城跡はシダ植物が多い。かつては県内最大規模のイワヘゴ群落があった。



丘陵部には、多くの谷があり、谷津田と呼ばれる水田とその上部に溜池が作られている。現在は休耕田が増えている。古くからの植物が残っている溜池には、ジュンサイ・ヒツジグサ等が生育している。

市内の湿地には、ハンノキ林が発達し、イソノキやカラコギカエデ、ノハナショウブ、アギナシ等が生育する。かつては、モウセンゴケやサギソウ、トキソウ等も見られたが、現在は確認できて

いない。

(2) 河川域の植物

河川や水路には、帰化植物のオオカナダモやコカナダモが多い。近隣の市町の水路に比べ、水路中の水草は少ない。



【荒川右岸の竹林】

川沿いや崖地^{がけち}には、護岸のため、マダケやハチク、モウソウチク等の竹を植えているので、竹林が見られる。



【シモツケコウホネ (スイレン科)】

江川沿いの水路には、世界中で栃木県内に4か所しか見られなくなってしまった、シモツケコウホネが生育している。



【ツルデンダ (オシダ科)】

河川沿いには、風通しはよいが、川からの湿っ

た空気も上がってくる崖が見られる。水が染み出す箇所も多く、カヤツリグサ科のタヌキランが生育している。南向きの陽の当たる崖には、暖地性のコモチシダが生育している。崖地に適応したツルデンダ(写真)やクモノスシダは、葉先を伸ばし、先に芽を付け、子株を増やす。

(3) 人家周辺の植物

人家周辺には、水田や畑等が広がり、土手やあぜ道には、草刈りをするため、草地ができる。

古くからの土手で、よく草刈りをしている場所には、アマナやアズマイチゲ、ツリガネニンジン、クサボケ、ススキ、オガルカヤ、メガルカヤ、ワレモコウ、クズ等、春植物や秋の七草見られる。

かつての水田は、湿田があり、春に耕耘され、水が貼られる前に開花し、実を着けるスズメノカタビラが見られたが、現在は少ない。代わりに乾燥に強く、節から発根する帰化植物のツルスズメノカタビラに置き換わった。夏の水田には、コナギ、イボクサ、オモダカ、イヌホタルイ、ウキクサ、アオウキクサ等が見られる。

畑周辺には、メヒシバ、シロザ、クワクサ、エノキグサ、スベリヒユ等の草が見られる。



【トキホコリ (イラクサ科)】

人家裏庭の湿った場所には、トキホコリが生育している。トキホコリは関東地方に見られる草だが、都心部では姿を消して、全国的な絶滅危惧種^{ぜつめつぎくしゆ}となっているが、ここ那須烏山市では、まだ見ることができる。

6

なすからの動物

平地から丘陵地に位置する那須烏山市は、林、湿地、溜池、河川、水田、畑等様々な環境がモザイク状にあり、多種多様な動物が生息している。

動物は、大きく無脊椎動物と脊椎動物に分けられる。那須烏山市内の動物について、主によく見られる種を表にした。その中から、この地域の環境を象徴するものや、あまり目にしないが確認されているものを数種取り上げ紹介する。



【カヤネズミ】

脊椎動物ネズミ目ネズミ科

日本では最小のネズミ。休耕田や河川敷などに生息しており、ススキやオギ、チガヤなどのイネ科の草で丸い巣を作って子育てする。



【オオマリコケムシ】

がいこう えんこうもく
外肛動物掩喉目オオマリコケムシ科

外来種。アメリカ東部原産の淡水コケムシの一種。寒天質の大型群体(写真)を作り、数10cm～数mにもなる。1972年河口湖、精進湖に持ち込まれた。休芽に16本の錨状のとげがある。



【ゴホントゲザトウムシ】

せつそくどうぶつ
節足動物ザトウムシ目マザトウムシ科

体長1cm内外国内分布の北限。分布は局地的。明るい林を好む。幼体で越冬し、成体は5～6月頃に出現する。



【ムカシヤンマ】

節足動物昆虫綱トンボ目ムカシヤンマ科

水が染み出す崖地の泥の中で幼虫時代(ヤゴ)を過ごす。那須烏山市では、特殊な生育環境があるため、春に成虫を見ることができる。



【サケ】

脊椎動物サケ目サケ科

11月上旬頃、那珂川や荒川、江川を遡上し、産卵する。漁ができるくらい遡上してくる場所の南限に近いと思われる。

那須烏山市内の動物リスト

- ・このリストは、主によく調査されている分類群とその主要な種類を取り上げた。確認されている種を網羅してはいない。この表の分類群は、統一された分類体系で区分していない。
- ・分類群毎に、あいうえお順に羅列した。
- ・カタカナは、和名。() 内のひらがなは、地方名、並びに外来種等のメモを記載したが、長文になるものは各分類の記載末に備考として付記した。

◎^{せきつい}脊椎動物

<p>^{ほにゅうるい} 哺乳類：アズマモグラ・アナグマ・アブラコウモリ・イタチ・イノシシ・カヤネズミ・キツネ・タヌキ・ツキノワグマ・ニホンリス・ノウサギ・ハクビシン (外来種)・ヒミズ 備考：ツキノワグマは、2020年11月にどこから来たかは不明の子熊1頭が捕獲、保護された。</p>
<p>鳥類：アオゲラ・アオサギ・アオバズク(夏鳥)・アカゲラ・アマサギ(夏鳥)・ウグイス・エナガ・オオタカ・オオヨシキリ(夏鳥)・カイツブリ・ガビチョウ(外来種)・カルガモ・カワセミ・クイタダキ(冬鳥)・キジ・キジバト・ゴイサギ・コサギ・コシアカツバメ(夏鳥)・コジュケイ・サシバ(夏鳥)・シジュウカラ・ジョウビタキ(冬鳥)・スズメ・ツバメ(夏鳥)・トビ・トラツグミ・ノスリ(まぐそったか)・ハシブトガラス・ハシボソガラス・ヒバリ・ヒヨドリ・フクロウ・ホトトギス(夏鳥)・ミヤマホオジロ(冬鳥)・ムクドリ・ヤブサメ(夏鳥)・ヤマセミ・ヨタカ</p>
<p>^{ほちゅうるい} 爬虫類：アオダイショウ・カナヘビ・クサガメ・シマヘビ・ジムグリ・シロマダラ・ニホントカゲ・ヒバカリ・マムシ・ミシシッピーアカミミガメ・ヤマカガシ・ヤモリ</p>
<p>両生類：アカハライモリ・アズマヒキガエル・アマガエル・カジガエル・シュレーゲルアオガエル・ツチガエル・トウキョウダルマガエル・ニホンアカガエル・ヤマアカガエル 備考：トウキョウサンショウウオ等、サンショウウオ類は確認されていない。</p>
<p>魚類：アユ・ウグイ(あいそ)・カマツカ(ばかぞう)・カワムツ(外来種)・ギバチ・コイ・サケ・ドジョウ・ヒガシシマドジョウ(すなさび)・ブルーギル(外来種)・ブラックバス(外来種)・ナマズ・フナ・ホトケドジョウ(ばばすこ)・ミナミメダカ・ヨシノボリ類</p>

◎^{せつそくどうぶつ}無脊椎動物

^{せつそくどうぶつ}節足動物

<p>昆虫類(甲虫類クワガタムシ科・ハナムグリ亜科・カブトムシ亜科)：カナブン・カブトムシ・クロカナブン・コカブトムシ・コクワガタ・スジクワガタ・ノコギリクワガタ・ミヤマクワガタ</p>
<p>昆虫類(蝶類)：アオスジアゲハ・アカシジミ・アカタテハ・アカボシゴマダラ(外来種)・アゲハチョウ・アサギマダラ(北上南下する種)・ウスバシロチョウ(南下している種)・ウラギンシジミ・ウラゴマダラシジミ・ウラナミアカシジミ・ウラナミシジミ・オオムラサキ・オナガアゲハ・キアゲハ・キタテハ・キチョウ・ギンイチモンジセセリ・クロアゲハ・クロコノマチョウ(北上している種)・ゴイシシジミ・ゴマダラチョウ・ジャコウアゲハ・スジグロシロチョウ・スミナガシ・ツバメシジミ・ツマキチョウ・ツマグロヒヨウモン(北上し増加している種)・トラフシジミ・ヒオドシチョウ・ベニシジミ・ミドリシジミ・メスグロヒヨウモン・モンキアゲハ・モンキチョウ・モンシロチョウ・ヤマトシジミ・ルリシジミ</p>
<p>昆虫類(トンボ類)：アキアカネ・アジイトトンボ・ウチワヤンマ・オオシオカラトンボ・オゼイトトンボ・オナガサナエ・オニヤンマ・ギンヤンマ・シオカラトンボ・シオヤトンボ・ショウジョウトンボ・チョウトンボ・トラフトンボ・ナツアカネ・ノシメトンボ・ハッチョウトンボ・ハラビロトンボ・ヒガシカワトンボ・ホソミオツネントンボ・ミヤマアカネ・ムカシヤンマ・モートンイトトンボ・ヨツボシトンボ</p>
<p>クモ類：アシダカグモ・オナガグモ・コガネグモ・ゴホントゲザトウムシ・ジグモ・ジョロウグモ</p>
<p>^{こうかくるい} 甲殻類：アメリカザリガニ(外来種)・カワリヌマエビ(外来種)・サワガニ・スジエビ・ヌカエビ・モクズガニ</p>
<p>^{たそくるい} 多足類：ゲジ・トビズムカデ・マクラギヤスデ</p>

軟体動物

<p>淡水産貝類：カワニナ・サカマキガイ(外来種)・タイワンシジミ(外来種)・マシジミ・マルタニシ・モノアラガイ</p>
<p>陸産貝類：オオケマイマイ・キセルガイ類(減少)・コハクオナジマイマイ(外来種)・ニッポンマイマイ・ヒタチマイマイ・ヒダリマキマイマイ・ヤマタニシ 備考：陸産貝類は、移動能力が大きくなく、その地に根ざした種が多い。全体に減少傾向と思われるが、キセルガイの仲間ほとんど見なくなった。</p>

7

なすからの景観

那珂川や荒川、江川などの河川が大地を刻み、段丘や谷津、丘陵など様々な地形を形成している。豊かな自然を残す「なすから地域」では、四季折々の景観を楽しむことができる。



【小木須の雲海（小木須）】

秋～冬の朝に川霧がよく発生する。国見峠展望台や平群山のパラグライダー基地などから見下ろすと雲海のように見える。



【西山辰街道の大桜（ハケ代）】

推定樹齢350年の大桜である。奥州征伐に向かう八幡太郎義家が、人馬を休めた際に桜の鞭を挿したものが根付いて成長したという言い伝えから、「義家桜」とも呼ばれる。根元には「桜観音」と呼ばれる馬頭観音が安置されている。



【大金ウォーキングトレイルの桜づつみ（小河原）】

「美しい日本の歩きたくなるみち500選」に選ばれた荒川沿いにある約350mの桜並木である。対岸の崖には、大金層の地層が連続してみられる。



【向山横穴墓群（南大和久）】

大金ウォーキングトレイルから荒川対岸の横穴墓が見られる。12基あることから十二口横穴墓群とも呼ばれる。



【花立峠のつつじ（小木須）】

5月上旬になると山ツツジで山全体が真紅に染まる。遊歩道を散策すると、那珂川の流れや街並み、日光連山などが一望できる。



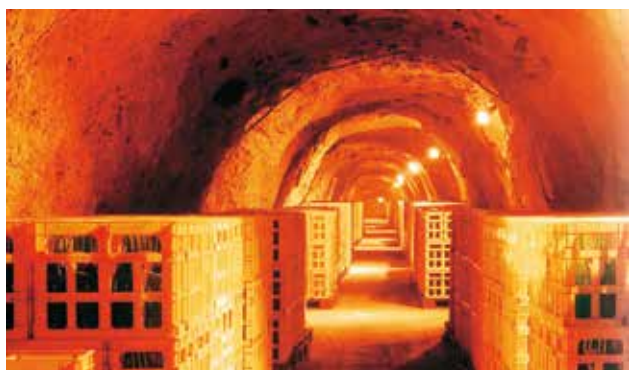
【ヤナ（滝田）】

那珂川はアユの漁獲量が日本一である。7～10月には、那珂川や荒川にヤナが設置される。



【烏山城址（中央）】

なすから地域には多数の山城跡がある。烏山城は藩主の居城として使われていた。急峻な崖と山体は天然の要塞となる。ここから産する火山角礫岩は石垣などに利用された。地形地質を巧みに利用した山城である。



【どうくつ酒蔵（神長）】

戦時中に戦車の組立工場として掘られた洞窟である。年間を通して気温や湿度が一定で、酒の貯蔵庫として利用されている。



【平群山からの眺望（興野）】

烏山城のある八高山や那珂川が望める。八高山に連なる山の形が伏せた牛の形に似ることから、烏山城は臥牛城とも呼ばれる。



【龍門の滝（滝）】

山深い場所でもないのに、落差約12mもの大滝である。水量によって様々な見え方となる。秋にはサケの遡上も間近で見られる。



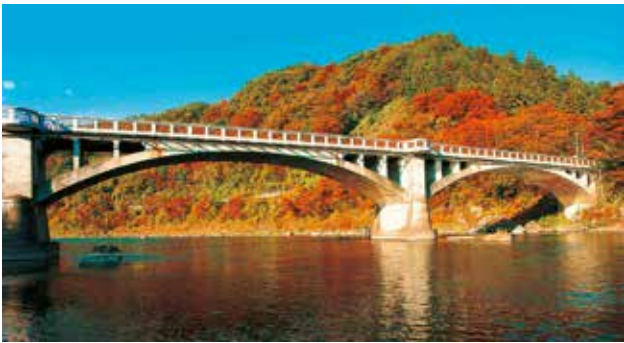
【落石の紅葉（宮原）】

川面に映える紅葉の山並、水面に揺れるアユ釣り船などの風景が、京都の嵐山と桂川に似ることから「関東の嵐山」や「那須嵐山」と呼ばれる。



【猿久保田んぼ公園（小埜）】

谷津地形を利用したのどかな公園で、雑木林の中に溜池や湿地帯もある。季節ごとの豊かな植物・生き物の観察や、森林浴などを楽しむことができる。



【境橋（宮原）】

昭和12年（1937年）に架けられたアーチ橋である。土木学会選奨土木遺産に認定されている。3連アーチ・円型バルコニー・楕円型の橋脚で、丸みのある柔和な印象の橋である。四季折々の景観を楽しめる。



【大金吊り橋（岩子）】

世界的にも珍しい主塔が片側のみの非対称PC構造の吊橋である。堤防を歩くと、荒川が大きく蛇行するのがわかる。



【烏山大橋（旭）】

那珂川に架かる長さ532mの白い斜張橋である。橋の両側には遊歩道とバルコニーが設置されている。那珂川の流れや四季折々の里山の風景が楽しめる。橋の両端には駐車場もある。



【志鳥の傘藤（志鳥）】

樹高約13mの榎の大木を覆うように巻き付いた藤である。花の時期には天然の藤棚となる。



【オオガネクジラ化石産地と大金層（高瀬）】

高瀬大橋付近では荒川右岸の崖に大金層が見られる。オオガネクジラはここで発見された。



【^{えいで}栄出の滝（小倉）】

荒川と支流の長者川がつくる落差約10mの斜瀑である。本流の荒川と支流の長者川で、下刻作用（川底を削り低くなる）の大きさが違うため生じた滝である。河川改修工事により、栄出の滝の対岸にアクセスしやすくなった。



【滝田の大滝（滝田）】

^{しんしよく}侵食されやすい中生代の地層（下流側）と、新生代の固い火成岩の地層（上流側）により形成された滝である。



【木戸不動尊（小原沢）】

茂木町との境界近くの断崖絶壁に建つ、舞台造りの珍しいお堂である。お堂脇の崖には、約1,800万年前の火山灰や火砕流堆積物の地層が見られる。



【太平寺の紅葉（滝）】

天台宗の古刹で、蛇姫伝説のモデルとなった「於志賀姫」や烏山藩主大久保家代々の墓がある。県指定文化財の千手観音菩薩立像や天蓋のほか、仁王門など市指定文化財7件がある。樹齢200年余のカヤの大木やカタクリの群生、紅葉、雪景色など四季折々の景色を楽しめる。



【^{たなだ}国見の棚田（小木須）】

国見岬展望台の眼下に、谷津地形を利用した棚田やミカン園が広がる。農林水産省の「日本の棚田百選」に選定されているが、耕作放棄地が目立つ。



【^{かごやま}籠山の奇岩群（川南）】

山中に多数の火山性堆積岩の奇岩が林立する。植生も豊かである。地主や有志の方々により、整備されている。

【年代の決め方】

考古学で最も基本となるのが、出土した遺物いぶつの年代を決めることである。これを編年作業へんねんという。縄文時代のように、文字のない時代の遺物の年代を決定する方法として、相対年代と絶対年代の2つが用いられている。

相対年代の基本は「上の地層から出土する遺物は、下の層の遺物より新しい」という、地学の「地層累重の法則るいじゅう」を貝塚の発掘などに応用したものである。それぞれの層から出土した土器を細かな型式に分けて比較し新旧を決定した結果、縄文時代は草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6時期に大きく分類され、さらに細分されている。

絶対年代は理化学的な方法である。具体的には放射性炭素ほうかい (^{14}C) が、約5730年で崩壊し質量が半分になる性質を利用して、試料中の炭素濃度を測定する方法である。現在は ^{14}C 原子を直接計数する方法(AMS法)を用いる場合が多い。

【縄文時代の暮らしとその変化】

縄文時代はイネやムギなどの穀物栽培以前の社会で、人々は自然の恵みを食料としていた。貝塚や低湿地の遺跡に残された当時の食料に関する遺物から、縄文時代の人々はシカやイノシシなどの獣の肉のほか、海や川の魚、クリやドングリなどの木の実を食べていたことが分かっている。また、道具の変遷へんせんの歴史からみた場合、鉄や銅といった金属の道具を使用する以前の石器時代に位置づけられ、人々は石や骨、木や草といった自然の材料を加工して様々な道具を製作し使用していた。

^{14}C を利用した年代測定によれば、縄文時代は1万年以上続いており、その間には環境変化に伴ういくつかの大きな社会的な変化がみられる。なかでも大きな契機は、気候の温暖化による植生の変化と、その後の寒冷化による冬季豪雪地帯の形成であった。西日本の森は照葉樹林化が進んだのに対し、東日本ではブナやトチなどの落葉広葉樹らくようこうようじゅの森が形成されたのである。

この変化に対して、縄文時代の人々は暖かい地域へ移動することなく、新たな環境へ適応することで極めて特色ある石器時代文化が形成された。今から約7千年前の縄文時代前期には、祖先の墓と広場を中心にして堅穴住居たてあなや大形の掘立柱建物ほったてばしらたてもなどがそれらを取り囲むように建てられた「環状集落かんじょうしゅうらく」と呼ばれるムラが形成されるようになる。こうしたムラには、まつりのための特殊な建物なども作られる場合があり、共同生活が営まれていたことが分かる。本市では鴻野山の後久保遺跡うしろくぼや、中山の富士ヶ丘遺跡などでこの時期のムラが確認されている。

【縄文時代中期のムラの成立】

続く約5千年前の縄文時代中期になると、袋状土坑ふくろじょうどこうと呼ばれる貯蔵穴を伴う集落が一般化する。袋状土坑には穴の深さや直径が2 mを越えるものもあり、木の実や根茎類こんけいを貯蔵していたと考えられている。この時期から後期の前葉まで東日本では大規模な集落が出現しており、なかには数百年も継続した例もある。なすから地域では上川井しんどうだいらの新道平遺跡、鴻野山おぎのだいらの萩ノ平遺跡、中山の白山平遺跡はくさんだいら、興野の羽場遺跡はばなどがあり、これらの集落が2 km程度の距離で同時に存在してい



曲畑遺跡で確認された遺構

【横穴墓とは】

今から1800年ほど前、土を高く盛り上げ高塚を築き有力者(豪族)を埋葬するという墓制が始まった。この高塚は古墳と呼ばれ、それから400年ほどにわたり、全国各地に様々な大きさや形式の古墳が数多く築かれたことから、この時期は古墳時代と呼称されている。

横穴墓は、古墳時代の後半ごろ(1600年ほど前)に北部九州地方で発生した墓制で、その後、九州地方から全国各地に伝播していったと考えられている。

特徴として、古墳のような盛り土(墳丘)を持たず、軽石凝灰岩などの柔らかく加工しやすい地層を選び、丘陵斜面や河川の崖面などに横穴を掘りこんで造墓しており、数基から数十基の単位で集団墓を形成している。

掘り込んだ横穴には、墓前で葬送儀礼などを行う小広場(前庭部)や入口部(羨門)、棺を搬入する通路(羨道)、死者を埋葬する部屋(玄室)などの施設が設けられ、入口を開けば何度でも埋葬(追葬)が可能となっている。

【横穴墓の分布】

横穴墓は、北九州地方から全国各地に伝播していったが、墳丘を持つ古墳とは異なり、築造にあたって地形や地質などの自然条件の制約を受けることから、全ての地域に定着したわけではなく、地域的な偏りが見られる。

栃木県は、その中でも全国有数の横穴墓が集中している地域として知られており、宇都宮市の「長岡百穴」や那珂川町の「唐御所横穴」など、その特異な景観から著名な史跡や観光地となっている横穴墓も存在する。

特に那須烏山市を含む県東部地域は、県内最大の横穴墓の密集地域となっており、本市のみならず周辺の市町でも多くの横穴墓を見ることができる。

【那須烏山市の分布状況】

本市の横穴墓の分布状況を詳しく見ると、下表のとおり、10箇所(群)で88基余りが確認されている。南那須地域に8群、烏山地域で2群と、市内においても地域的な偏りが見られる。

名称	基数	所在地(旧町・大字)	
小志鳥	32	南那須	志鳥
山崎	6	南那須	熊田
古館	7	南那須	三箇
向山	12	南那須	南大和久
鴨毛	2	南那須	大里
岩穴	6	南那須	曲田
芝下	9	南那須	曲田
吉原	3	南那須	曲田
中山	2	烏山	中山
大日向	9	烏山	落合

※書籍等に記述があるものの、現在は確認できない横穴墓もある

【南那須地域の横穴墓】

県中央平地部の東側を占める喜連川丘陵が地形の大部分を占めている。これらは、火山の噴出による粗粒の軽石凝灰岩層や土砂の堆積層が主体となり、風化が進むと急傾斜の崖を形成して丘陵や段丘に露出することが多い。また、丘陵に沿うように那珂川支流の荒川・江川、その他小河川が網の目状に流れており、河川の浸食作用による河岸段丘が発達している。

本地域の横穴墓を河川の流域で分類すると、江



曲田横穴墓群

川・岩川流域と荒川流域の2つのグループに分けられる。

江川・岩川流域には、小志鳥横穴墓群・山崎横穴墓群の2群が存在する。小志鳥横穴墓は、32基という数もさることながら、丘陵崖に横穴墓が上下左右に連なる独特な景観は見ごたえ十分で、栃木県を代表する横穴墓となっている。

荒川流域は、上流部に古館横穴墓群、中流部に向山横穴墓群が存在する。向山横穴墓群は、段丘崖に軽石凝灰岩が斜めに堆積している層を選んで掘削している。当時の人々が、同じ崖面でも柔らかく加工が容易な地層を選んで墓を築造していることが確認できる例として貴重である。近年、



向山(十二口)横穴墓群

周辺の藪や立木を伐採したため、横穴墓が斜めに並ぶ姿が対岸から良く観察できるようになった。

荒川の下流部は、県内最大の横穴墓の密集地域となっている。荒川からやや奥まった大里・曲田地区の丘陵崖に所在する横穴墓(鴨毛・岩穴・芝下・吉原)は、4群が約2kmの狭い範囲に集中しており、築造された時期や横穴墓どうしの関係性が注目される。

岩穴横穴墓群は、後世の信仰の対象とされ、墓内部の壁面に仏像(室町時代)が刻まれるなど、本地域の歴史を知る上で重要な横穴墓である。

【烏山地域の横穴墓】

烏山地域は、中心部を南流する那珂川の両岸域に河岸段丘が発達し、人々の生活の場となっている。左岸と右岸とでは地質に大きな差が見られ、様相が大きく異なっている。

左岸地域は、八溝山系の標高の高い山稜が南北に連なり、主に火山性の硬い岩質となっていることから、本地域には横穴墓は確認されていない。

右岸地域は、那珂川の南那須地域から続く丘陵地帯となっており、中山地区に中山横穴墓群、落合地区に大日向横穴墓群が存在している。

中山横穴墓群は、江川・岩川流域に隣接する丘陵地内、大日向横穴墓群は、荒川下流域の奥まった丘陵に存在していることから、これらの横穴墓は、烏山地域に存在しているものの、地形的に見て江川・岩川流域、荒川流域のそれぞれのグループに属する横穴墓であると考えられる。



中山横穴墓群

【まとめ】

本市の横穴墓の分布状況を見ると、他地域と同様に分布に偏りがあり、南那須地域及び烏山地域の那珂川右岸の喜連川丘陵や、河川浸食による段丘崖などに限定されていることが分かる。

これらの地層には、加工が容易な軽石凝灰岩が堆積し、掘削道具が発達していなかった時代でも掘りやすい地層であったことから、当時の人々はこれらの場所を選んで墓を築いたのであろう。

横穴墓の多くは、長年にわたる崖の浸食や崩落により我々の目に留まることになった。調査などで横穴墓に立ち入ると、苔むした壁面に当時の掘削道具の痕が残され、墓地としての威厳と信仰の対象としての厳かな雰囲気を感じられる。

本市が県内屈指の横穴墓の密集地域であることは誇るべきことである。今後、学術的な研究の進展とともに、地域の文化遺産としての保存・活用が図られて行くことを期待したい。

【はじめに】

栃木県北東部を流れる那珂川、その支流^{ほうきがわ} 箒川との合流点は、侍塚古墳をはじめとする前方後方^{からのごしよおうけつ} 墳や唐御所横穴などの横穴群^{こひ}、日本三古碑である那須国造碑が造営された地域である。このほかにも古代那須郡役所である那須官衙遺跡、白鳳寺院である浄法寺廃寺跡・尾の草遺跡、畿内と陸奥を結ぶ東山道、那須与一に代表される那須氏の城館跡を代表する那須神田城跡など国宝、国指定史跡が集中する。

この地を舞台に今から350年以上も前の元禄期に水戸光圀^{さつさむねきよ}・佐々宗淳・大金重貞等による日本で始めての学術目的となる発掘が行なわれている。平安時代に編さんされた『国造本紀』には栃木県域に「下毛野」「那須」の2国造がみえ、下毛野国造は鬼怒川・田川・思川、那須国造是那珂川流域を中心とした勢力と考えられる。那珂川流域は^{ひたち}常陸（現在の茨城）や陸奥国との関わりが深く、地理的、水系的に多方面との交流が可能な独自文化圏を形成し、「古代那須国」とも称されている。



図1 小銅仏(沢村神社)

【古代国家と那須】

7世紀後半になるとわが国では律令国家の整備が進められる。陸奥国支配・蝦夷^{えみし}施策など領域支配の要衝である下野国では、持統元(687)年、3(689)年、4(690)年に帰化新羅人^{しらぎ}が配置されるなど進んだ文化がもたらされた。那須国造碑は、永昌元年(唐[周]新羅年号・西暦689年)に那須国造から評督となり、庚子(日

本干支・西暦700年)に死去した那須直^{なすのあたいで} 韋提の墓碑である。蓋首碑^{がいしゅひ}という笠石をのせる形態や漢文による高度な文字表現に新羅人の関与がうかがえる。浄法寺や尾の草遺跡から出土する瓦の文様や技術系譜、那須烏山市沢村神社に伝わる小金銅仏は新羅仏とされ、新羅などの渡来文化の影響がうかがえる(図1)。

下野国は足利・梁田・安蘇・都賀・寒川・河内・芳賀・塩谷・那須の九郡あり、那須郡には、那須・大筒・熊田・方田・山田・大野・武茂・三和・全倉・大井・石上・黒川の十二郷からなる。特に那須地域は正倉院蔵の「下毛野奈須評□二」銘の弓矢、那須国造碑文などから、国造、評、郡という、古代の地方行政組織の変遷が明らかとなっている。(表1)

表1 那須の表記の変遷

年	646	682	689	701	713
郡名等の表記	・那須国造	那須評督	那須郡司		
	下毛野奈(那)須評	下毛野国那須評	下毛野国那須郡	下野国那須郡	

【古代那須郡役所 那須官衙遺跡】

那須郡の役所である那須官衙遺跡は、8世紀から10世紀にかけて造営され、昭和15(1940)年『菟^う私印』(国重要文化財)の銅印発見により、注目を浴びることになった。古瓦の散布から字名をとって梅曾^{うめそ}廃寺と呼ばれていたが、昭和30(1955)年以降の調査で倉庫群が確認され、寺跡ではなく郡役所であることが明らかになった(図2)。

遺跡の範囲は、少なくとも南北200m、東西600m以上あり、溝で囲まれた西ブロックは「倉」、中央ブロックは実務的な「曹司^{そうし}」施設から「倉」へ、東ブロックは「政庁」、東南ブロックは、六角形を含む掘立柱建物や竪穴住居跡からなる「館」と呼ばれる交通に関わる施設から構成される。また、西ブロックと中央ブロック間には、東山道と考えられる道路遺構が認められ、延長上に浄法寺廃寺跡がある。西ブロック内に瓦葺基壇建物^{かわらぶききだんたてもの}(TG161)があり、南北6間(約27m)、東西2間(約10m)

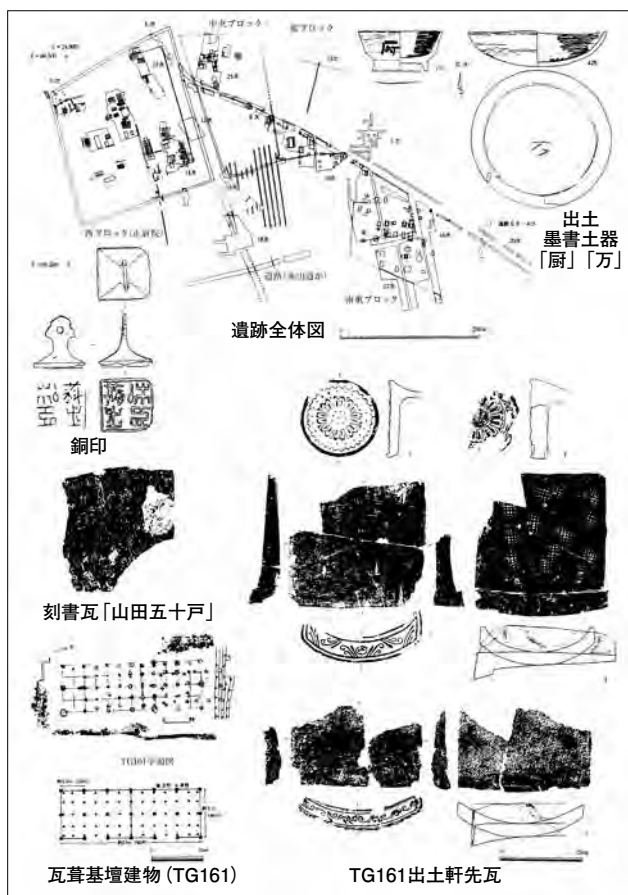


図2 那須官衙遺跡と出土遺物

の南北棟となる。瓦は、浄法寺廃寺系、下野薬師寺系、下野国分寺系の軒先瓦が葺かれ、築造時期は8世紀中頃と考えられる。宇瓦の顎部には、丹が付着したものが認められる。建物の性格については調査段階から二通りの考え方がしめされた。一つは、本遺跡中唯一の瓦葺丹塗建物であり、規模からも正殿と考えるもの。もう一つは、西ブロックが総柱式建物を中心とした倉庫群が「正倉院」を構成していることから、この建物を特殊な倉である「法倉」と考えるもので、現在は後者の説が有力である。

さらに、郡衙に関連する漆工房跡である上宿遺跡、赤色顔料に伴う工房跡である上の台遺跡などの手工業生産遺跡が東山道に沿い、那珂川左岸からの沙金や須恵器などが運搬される地点で認められている。すぐ西にある駒形6号古墳遺跡では、9世紀後半の竪穴住居が発見され、「南曹司」「法南」など多数の墨書土器が出土している。「曹司」とは役所での実務的施設をさす用語であり、この地点が墨書土器のしめす那須郡衙の「南」3kmに位置すること、古墳時代からの祭祀遺跡である

三和遺跡や延喜式内社である三和神社など当地域の伝統的地域での生産遺跡と陸上、水上交通が交差する地点で「南曹司」とされる施設の存在を積極的に評価することができる。

【那須の産業 産金】

健武山神社は馬頭町健武にあり、社伝には大同元(806)年創建とある。承和2(835)年「下野国武茂神に従五位下を授け奉る、この神は沙金を採る山上に座する」『続日本後紀』の記事がみえ、健武山神社付近の武茂川流域での産金が考えられる。東大寺廬舎那仏(奈良の大仏)は聖武天皇が天平15(743)年に造営を発願し、4年後に鑄造を開始している。大仏の表面を鍍金するために必要な「金」は、それまで我が国で産出されていなかったが『東大寺要録』には下野国での金産出が天平19(747)年に報告されたとし、天平21(749)年の陸奥国小田郡から大量の金もたらされ年号が天平感宝となる『続日本紀』より2年早い記述がみえる。さらに、康保4(967)年に下野国から朝廷に納める交易雑物に砂金150両、練金(金塊)84両がみえ、砂金採取は徭夫を使い、その食糧は正税をあてることから官が直接的に採取にあたったことがわかる『延喜式』。当時、陸奥とこの下野那須でのみ金の産出が可能であったことから特に国家的な「稀少資源」とであると共に「神」として中央から重要な存在となっていたことが推定できる。以後、黄金の国ジパングとされる日本における産金のまさに嚆矢として位置づけることが可能である。

【おわりに】

各時代にわたり、重要な遺跡が集中する那須地域は、那珂川による交流、東山道による交通、陸奥国への入口、蝦夷施策の最前線、豊かな自然・地下資源により、隆盛を迎えてきた。これこそが「古代那須国」と呼ばれる最大の由縁なのである。

【東山道とは】

古代の行政区画を指し、当時の政治の中心地から東の東北地方にかけての内陸部の地域（近江、美濃、飛騨、信濃、武蔵、上野、下野を、のちに、陸奥、出羽を加え、771年武蔵を除いた8か国）を指す。

これは、これまでの豪族を中心とした政治から天皇を中心とした政治へと移り変わる大化の改新は、皇極天皇4（645）年6月14日の乙巳の変に始まる一連の国政改革の一環として、全国を七道（山陽道、山陰道、東海道、東山道、北陸道、南海道、西海道）に区分した。その行政区の中を通る道路を駅路として整備した。

この駅路を含む交通制度は、大宝元（701）年に制定された大宝律令、その後の養老律令に駅制、伝馬制の古代の交通制度が規定された。

【駅路とは】

駅路は都（当時は平城京）を起点に、都と地方を結ぶ路で、中央と地方の情報伝達のために設けられた通信制度で、律令制に駅制で使用すると規定された官道（現在の高速道路、国道）である。駅路は、山陽道と西海道の一部（都から大宰府）を大路、東海道、東山道を中路、その他を小路として区分している。

駅路には約16kmごとに駅家が置かれていた。駅家は、乗り継ぎ用の駅馬や宿泊、休憩、食事などを提供する施設で、その役割を持つ駅戸が配置され、駅子が出て、馬の世話などにあたり、駅戸の中から駅長を一人任命し、その管理にあたらせていた。

この駅家に置かれた駅馬は、大路にあつては20頭、中路では10頭、小路では5頭と規定されていた。

駅馬は、諸国との間の緊急連絡、公文書の伝達、特別の用務による官人の旅行などに使用され、その利用にあたっては、利用証として駅鈴を携行する決まりがあった。

【下野国内の東山道駅路】

下野国内は9郡（足利、安蘇、都賀、寒川、河内、芳賀、塩屋、那須）に分けられ、足利、三毳、田部、衣川、新田、磐上、黒川の7駅に駅家が置かれていた。但し、これは平安時代の法律『延喜式』に書かれているもので、それ以前の奈良時代に駅家が置かれた名前は不明である（東海道駅路がある常陸国では『常陸国風土記』の中で奈良時代の駅名が記載されている）。この新田駅家が、那須烏山市鴻野山地区の長者ヶ平遺跡の可能性がある。郡と郡を連絡する道路を伝路といい、安蘇、都賀、芳賀、塩屋、那須郡には、伝馬が5頭ずつ置かれていたとされている。

下野国内の初期の東山道駅路として、調査例で確実なものは、下野市（旧国分寺町）北台遺跡から両側溝のある約12mの路面がある道路遺構が確認されている。この側溝から7世紀後半～8世紀初頭の土師器が出土している。

ここから、宇都宮市と上三川町酒井の上神主・茂原官衙遺跡を通り、杉村・杉村北遺跡を通過することが分かっている。

杉村・杉村北遺跡は駅路が直線で400m以上確認され、大きく3回の改修が確認できている。初期は8世紀中頃で、路面幅約10～14m、最終が9世紀中頃以降で、路面幅約6mと路面が縮小されている。この杉村・杉村北遺跡を北東に進むと岡本台地の東端に立地する上野遺跡があり、更に北上する旧河内町の釜根遺跡、日枝神社南遺跡で確認された駅路になる。日枝神社南遺跡は約8mの道路幅が確認されている。

この日枝神社南遺跡から東へ進み、鬼怒川を渡河すると那須烏山市鴻野山地区の厩久保遺跡、助治久保遺跡、上川井地区の新道平遺跡等の駅路を通過し、那須郡衙（那須郡家とも言い、那須郡の役所）に至る。

【那須烏山市内の東山道駅路】

東山道駅路は、旧氏家町、旧喜連川町と旧南那

【長者ヶ平遺跡とは】

長者ヶ平遺跡は那須烏山市鴻野山字長者ヶ平に所在し、喜連川丘陵上の平坦面に位置している。標高は約200mで、遺跡周辺は東に荒川支流の長者川、西に小貝川支流の大川が南流している。遺跡は、享保8(1733)年、湯津上村(現大田原市)の木曾武元による『那須拾遺記』巻之十五の中に焼米(炭化米)が多く採集出来る地として記されている(木曾 1733)。また、地元で八幡太郎義家(源義家)による長者屋敷の焼き討ち伝説の地として語り継がれてもいる。

遺跡は、平成13(2001)年度から平成17年度に栃木県教育委員会の委託を受けた(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターにより、遺跡がどれだけ残されているか、遺跡の範囲はどこまでなのかという、範囲確認調査が実施された(板橋他 2007)。また、平成23(2011)年度からは那須烏山市による範囲確認調査も実施している。

その結果、^{ほったてぼしらたてものと}掘立柱建物跡、^{そせきたてものと}礎石建物跡、^{かんが}堅穴建物跡、大型の土坑、区画大溝、道路遺構などが確認された。

遺跡の範囲は、南北220m、東西350m以上、北側の丘陵張り出し部分も含めると南北は370m以上となる。遺跡は、建物配置、出土土器等から奈良・平安時代の^{かんが}官衙(役所)であることがわかった。さらに、遺跡の北側を通る東山道駅路や遺跡の西側に接し、地元で「タツ街道」と呼ばれている小道も古代に遡る道路であることがわかった(木下 2007)。

このことから、遺跡は現在も良好に残っていること、古代の交通の重要な場所にあり、古代国家の交通体系や国と地方の支配体制を示す貴重な遺跡であることなどから、2009(平成21)年2月12日付けで国の史跡に指定された。

【遺跡の概要】

これまでの確認調査により、遺跡の最も平坦な部分には^{せいてん}正殿、^{わきてん}東西脇殿、^{せいちょう}南門がある政庁(政務

や儀式を行う場所)域があり、これらの建物がコの字型に配置されている。また、政庁内の建物は、2～3回の建て替えが行われていることがわかっている。

正殿は、南・西・東の3方に廂が付く建物である。東西脇殿は^{けたゆき}桁行総長(長さ)は約36mで、^{はりゆき}梁行総長(幅)は4.8mである。

政庁の西側は、掘立柱建物を中心とした建物。掘立柱建物から礎石建物に建て替えられている。建物群は、東西方向に建物をそろえて建てられている。また、北・西・南の三方のみを幅4m、深さ1mの大溝が逆コの字型に区画している。大溝の内側に^{しやうぞう}総柱式の掘立柱建物群を6列以上、礎石建物群を6列確認している。建物の中には、稲の穂の断片が付着した炭化米も出土している。

これらのことから、この建物群は、稲等を保管した^{しやうぞう}倉庫(正倉)であることがわかった。

遺跡は、焼け米(炭化米)が多量に出土していることから、倉庫が火災にあったと推測されていたが、確認調査により実際に5棟が火災にあったことが判明した。いずれも、8世紀後半から9世紀代と考えられている。

また、政庁の東側にも倉庫群が建ち並ぶが、西側の倉庫群のように大溝によって区画されていない。

政庁域の北側には、東西幅約120m×南北長約150mにわたる土地の張り出しがあり、その中央付近に掘立柱建物と堅穴建物を確認している。掘立柱建物4棟のうち2棟は、柱と柱の間が狭く、特殊な建物とみられる。この地点は、東山道駅路を見下ろすことが出来る眺望がよい地点であり、見張り台かもしれない。

【タツ街道】

タツ街道は、遺跡の南方23kmに位置する芳賀郡衙(今の県庁の出先機関、出張所)である「^{どうほうだ}堂法田遺跡」から延び、長者ヶ平遺跡の西側を通り、東山道駅路に接続する道路である。長者ヶ

平遺跡に接続する地点の道路幅は約9mと広い道路であることを確認している。北は塩屋郡衙まで延びる可能性もあり、郡衙間を結ぶ連絡道の可能性も指摘されている(木本 1993)。

【長者ヶ平遺跡の時期】

長者ヶ平遺跡は、政庁成立の前後により、大きく三時期(I・II・III期)に分けられる。I期は、政庁成立以前の大型掘立柱建物を中心とした時期で、8世紀前半以前。II期は、政庁成立時期で、8世紀前半代から9世紀後半代。III期は、10世紀代と考えられ、政庁廃絶後の小規模な掘立柱建物が数棟建てられる時期。



長者ヶ平官衙遺跡・東山遺跡 イメージ図(南方向から)



長者ヶ平遺跡全体図

【長者ヶ平遺跡の検討】

長者ヶ平遺跡は、施設の構造や遺跡の範囲などから、芳賀郡内に所在する官衙遺跡である可能性は間違いない。その官衙としての性格を考えると次の様な施設を想定できる。第1案は、芳賀郡衙の別院(出先機関)と考える案。第2案は、東山道駅路上の駅家の一つの芳賀郡の新田^{にいたのうまや}駅家と考える案。第3案は、第1・第2案の施設が複合した官衙と考える案である。

発掘調査から知り得た情報から、交通機関に関わる性格が含まれた遺跡の可能性は高いと思われる。

(引用文献)

- 木本雅康. 1993. 下野国の古代伝路について. 『交通史研究』第30号. 交通史研究会.
木下 実. 2007. 『東山道駅路発掘調査報告書』. 那須烏山市教育委員会.
板橋正幸 他. 2007. 『長者ヶ平遺跡』. 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.

【八溝という地域】

八溝山は、栃木県・茨城県・福島県の県境に沿って南北に長く続く山地である。標高1,022mの八溝山を主として、北から八溝・鷲子・鶏足・筑波の4つの山からなり、周囲に流れる那珂川・久慈川とその支流によって長い時間をかけて河岸段丘という地形がつけられている。自然にできた平らな地形には、大昔から人々が生活していた痕跡である「遺跡」が数多く残されている。八溝山は、安山岩・花崗岩で形成された山であり、花崗岩は金属成分を豊富に含む岩石である。それが風化・浸食を受けて川に流れ込むため、那珂川や荒川、武茂川などでは、砂鉄や砂金などが古代から豊富に採取できた。八溝山を中心とした地域は、鉱物資源と森林、水に恵まれた地域なのである。

【鉄づくりとは】

考古学の世界では、鉄の素材や鉄製品をつくることにかかわった遺跡を「製鉄遺跡」と呼んでいる。鉄づくりは複雑で様々な工程に分かれており、それぞれの技術の痕跡が見つかっている。東日本では、鉄の原料は川や海で採取する砂鉄である。砂鉄から純度の高い鉄素材をつくるためには、つくりたい

量の10倍の量の砂鉄が必要になる。

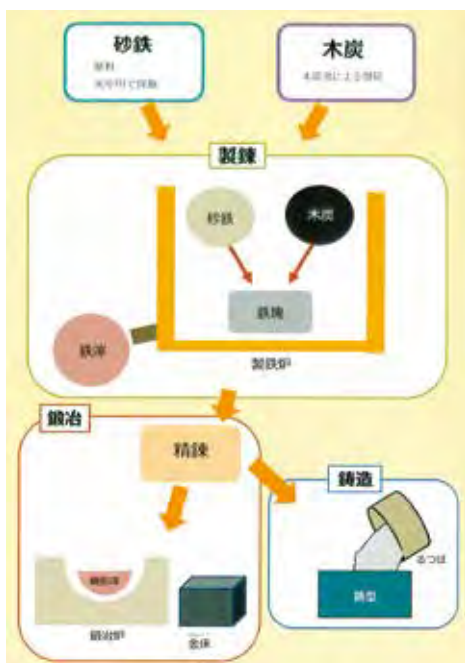
砂鉄に含まれている不純物を、製鉄炉で木炭と一緒に高温で熱して炭素と結びつけて溶かし出す「製錬」を行うことで、純度の高い鉄をつくる。製鉄炉がつくられるのは、水が豊富な沢の近くで、日当たりのよい南か東側の斜面、作業のできる平場のある斜面であることが多い。さらにつくりたい鉄の12～13倍の量の木炭が必要であるため、森林の近くが選ばれる傾向がある。出来上がった鉄の素材は、成分を調整する精錬、叩き鍛えて形をつくる鍛冶（鍛造）、溶けた鉄を型に流して形をつくる鑄造などを経て、鉄製品となる。それぞれの設備や工房、材料を集めるためにもたくさんの人員と専門的な知識が必要になるのが、鉄づくりであった。

鉄や鉄製品を生産できるということは、多くの労働力と交易力を持ち、高度な技術を得て実践することができた権力者が存在したことをあらわしている。鉄製農具・工具を使うと、作業効率や生産効率はおよそ7倍に上昇すると言われる。鉄生産は、より多くの財を蓄える、武器として使うなど人々の生活を大きく変化させた。

鉄づくりに使う炉などの設備は、最終的に壊されることが多いために、遺跡からは焼けた粘土や飛び散った細かい鉄の破片、砂鉄の不純物が多く含まれた「鉄滓」という鉄の塊が主な痕跡として見つかる。この種類によって、どのような役割を持っていた遺跡なのかを判断することができる。

日本には、まず完成した「鉄製品」が伝わってきた。その後、鉄製品を加工する「鍛冶」の技術、そして砂鉄や鉄鉱石から鉄素材作り出す「製鉄」技術が伝わって広がった。それぞれ伝わってきた時期に差がある。

那須地域で確認されている一番古い鉄製品は、古墳の副葬品として見つかる鉄剣や鉄刀、鉄製の工具などである。古墳時代までの鉄製品は、有力者が権力の象徴として所有していた。この頃には鉄製品を加工する技術はまだ東日本には伝わっていないため、鉄製品は基本的に輸入品と考えられる。古墳時代の中頃（5世紀中ごろ～6世紀）には鍛冶



鉄づくりの工程

の技術が伝わり、製錬技術が伝わるのは、奈良・平安時代(8世紀以降)になってからである。

【鉄づくりと那須地域】

飛鳥時代になる7世紀から8世紀にかけて、天皇を中心とした律令国家の国営事業として、地方をとりまとめる「役所」の建設や、都と地方の役所同士をつなぐ道路を敷く工事が全国的に進められるようになる。那珂川町の那須官衙遺跡(那須郡の役所跡)や、那須烏山市・さくら市の長者ヶ平遺跡(芳賀郡の役所跡)か、東山道駅路跡(道路跡)などが発見されている。その大規模な建設事業をきっかけに、瓦や須恵器などの登り窯を使った焼物の技術、漆や朱を使う加工技術、建物の建設技術、仏教などの様々な新しい文化が各地に伝わってくる。役所の建設などには、釘や鋸などの建築資材や作業のための工具をつくる必要があり、たくさんの鉄製品が求められた。

8世紀後半頃には、国家は東北地方に勢力を延ばすため、東国諸国に武具の製作や修理を命じ、武器や武具の調達が積極的に進められたことが記録に残っている。発掘調査では、大きな鉄滓や釘、貴重な鉄製品などが出土するため、役所の周辺に専門的な工房がつくられたことがわかる。

9世紀後半になると、国が管理していた様々な技術が、地域の人々に広く伝わっていく。特に那珂川・荒川の流域では複数の場所で鉄づくりが行われるようになっていったことがわかっている。一般のムラでも貴



北原遺跡の位置図

重だった鉄製品の利用が増え、田畑や土地を耕し、所有地を広げて農業が盛んに行われ、地方の有力者の力が増していく。

古代の日本は、荒れ地を自分で開拓・開墾した場所を私有地化できる、という法律があった。国は、国民から税として土地の範囲に応じた稲などを納めさせていたが、その税を増やすためにより土地の開墾を奨励する。743年、「墾田永年私財法」という法律が出されたことにより、荒地から新たに耕した土地は永年で所有できることになった。これをきっかけに全国的に寺社や地方の実力者たちが鉄製品を駆使して開墾・開田を活発に行った。たくさんの土地や作業する人々を取りまとめ、たくさんの作物をつくって権力を身につけ、財を成した「富豪之輩」と呼ばれる有力者が登場した。

この富豪之輩がいたと考えられているムラが、那須烏山市で発見されている。北原遺跡(那須烏山市高瀬)は、近くを流れる荒川から砂鉄をとっていたと考えられる。この集落では、鍛冶の痕跡のほか、砂鉄から鉄を製錬した際に確認できる鉄滓がたくさん見つかっており、鉄づくりのすべての工程を行っていたと考えられる。また、多種多様な鉄製の工具や、緑釉陶器などの高価な陶磁器が発見されており、当時の那須地域の中心となるような人々が生活していたムラであったと考えられる。

ほかにも滝田本郷遺跡(那須烏山市滝田)でも、一連の鉄づくりが行われていた痕跡が残っている。緻密な鉄製品を使っていた大きなムラ・小鍋前遺跡などもあり、国や役所の力や弱まっていく一方で、那須地域の中心がなすから地域に移っていったことがわかる。

飛鳥時代から奈良・平安時代にかけて、なすから地域は国と地域の力が移り変わる重要な地域である。発掘調査で明らかになっていない製鉄遺跡が、まだまだ眠っている可能性が高い。なすから地域の歴史が明らかになれば、古代の那須地域全域の歴史がもっとくわしくわかるようになると考えられる。



北原遺跡で採取された鉄滓

【なすから地域の城郭遺跡】

城郭とは、「曲輪くるわ」という守られた平地を持つ、主に中世から近世にかけて営まれた施設である。曲輪の周りには土塁を盛り、あるいは堀からぼり（空堀・水堀）を掘るなど、地面を改変して築くことが多く、古墳と同じように目に見えて残るので、今も山の中を散策することで発見できる。また、かつて城郭があった場所には関連する地名（例えば「城山」「内城」「外城」「山小屋」「根小屋」「要害」など）が残ることが多いので、地名を手掛かりに発見することもある。

そうした城郭が、栃木県内では約500件、県北の那須地域では約130件、遺跡として登録されている。そのうち、なすから地域（那須烏山市）には36件分布する。

もちろん、なすから地域を代表する城郭は烏山城だろう（詳細はⅢ-8を参照）。烏山城は、16世紀初頭まで上下2家に分かれていた那須氏のうち、下那須氏側の本拠地だった（那須氏の歴史はⅢ-9を参照）。そして烏山城を中心に、その近辺には今も、出城や那須氏の一族・家臣が営んだ城郭遺跡が多く残る。

実はこれらの城郭の多くが、いつ築かれてどう使われたか、ほとんどわかっていない。城郭そのものの歴史を語る史料は少なく、多くの場合、当時の政治や合戦の記録を基に推測するしかないのだ。本節では、戦国時代初期に烏山城の周辺で起きた合戦の記録（「那須文書」）を基に、なすから地域の城郭を紹介していこう。

【享徳の乱となすから地域】

享徳3年（1454）、鎌倉公方かまくらくぼう（室町時代の関東統治機関である鎌倉府の長官）の足利成氏が、鎌倉府の重役である関東管領うえすぎのりただ上杉憲忠を殺害したことをきっかけに、関東の有力な武家は成氏派と上杉氏派（室町幕府が支援）に分かれて合戦を繰り返した（享徳の乱）。一般に関東では、これ以降を戦国時代と呼ぶ。

乱の序盤、下野国（現栃木県）では烏山城主の那須持資なすもちすけが成氏に従い、康正2年（1456）3月には敵対する茂木満知もてぎみつともの茂木城を攻めた（地図）。だがこの時、烏山城の近くでは、森田氏と向田氏が茂木氏に内応し

て持資から離反していた。そのため持資は、茂木城への道として向田氏の拠点である向田城を通行できず、おそらく那珂川を渡り、対岸の稲積城を中継基地にして、那珂川左岸を南進して茂木城に迫ったと思われる。まずはこの向田城と稲積城の2城を見てみよう。



地図 康正2年茂木城合戦の関連城郭

【向田城跡と稲積城跡】

向田城跡は、東西に流れる荒川が那珂川に合流する近くの南岸に所在する。烏山-茂木間を結ぶ幹線（現国



写真1 向田城跡の曲輪内部 (2022.6.25)

道294号)上に位置し、荒川の渡河点を押さえる交通の要衝である。近くには埜前要害はなわまえや籠山要害かごやまもあり、ともに荒川・那珂川流域を監視していたと思われる。今では土塁や堀などの目に見える遺構はほとんど失われたが、曲輪まがりや切岸きりぎし(斜面を削って造った城壁)の跡などが残り、地形そのものは当時の姿を留めている(写真1)。

一方稲積城跡は、向田城の対岸、那珂川左岸の低湿地に孤島状に浮かぶ台地上に位置する。伝承によれば、烏山城に移る前の那須氏の居城といわれている。城内は御城・中城・下館・外城の4つの曲輪に分かれ、南北800m・東西300mにわたる広大な城域を持ち、現在も大規模な土塁・空堀などの遺構を残す(写真2)。



写真2 稲積神社境内に残る稲積城の土塁 (2022.6.25)

また稲積城の南東の山中には、茂木城に向かう持資が通ったであろう古道が延び、背後の山上から、おそらく稲積城の出城と思われる高館城・高館上の城・大将古家要害の3城が、古道を監視している(地図)。このように稲積城に到る道は、下那須氏本領への入口として厳重に警備されていたと思われる。稲積城が那須氏に関わる伝承を持つのは、おそらく、今回の合戦だけでなく中世末にいたるまで何度も烏山城の前線基地として使用されたからだろう。

【「森田新要害」をめぐる戦い】

さて、茂木城を攻める持資からすれば、現状では自身が攻めている茂木城と本拠烏山城との間に、敵勢力の森田氏・向田氏が入り込んでいるので、戦況は好ましくない。そのため足利成氏の命令によって、宇都宮明綱うつのみやあきつな(宇都宮城主)が持資の援軍として森田氏・向田氏の攻略を担当することになった。これに対し、向田氏はまもなく降服したようだが、一方の森田氏は新たに「森田新要害」を構えて抵抗を続けた。

この「森田新要害」は、現在城郭遺跡として登録されている森田城跡に当たる可能性がある。森田城跡

は森田地区の最東端に位置し、荒川右岸の氾濫原はんらんげんに浮かぶ輪之内集落を一望できる山上に築かれている。森田城から西の尾根続きには、出城と思われる加登べ城かとべじょう(根小屋城)・高館城を配してともに集落を守り、主として西側からの敵の侵入に備えている。城郭の形はとてもコンパクトで、今も現地に行けば大規模な土塁や空堀などの遺構を目にすることができる(写真3)。



写真3 森田城跡の堀と土塁 (2022.6.25)

「森田新要害」の落城については史料上確認できないが、この年(康正2年)の11月には、宇都宮明綱が南の中根(現茂木町の千本城付近)に兵を進めているので、その時までには落城していたと考えられる。中根は茂木城の北西約4kmに位置し、烏山-茂木を結ぶ幹線上における茂木満知の最終防衛線であろう。最終的な茂木城の落城も史料からは確認できないが、この進軍を受けて、それほど日を持たずに持資に攻められていた茂木満知も降伏したと思われる。

【さらなる分布調査の必要性】

今回は戦国時代初期の合戦史料から、なすから地域の城郭をめぐる戦いを紹介した。今後研究が進めば、他の時期や別な城郭の物語も描けるようになるだろう。

この先、戦国時代が進むにつれ、那須氏と東の常陸国の佐竹氏との間で戦いが激化する。その国境付近では、近年茨城県側で、常陸大宮市史の編さん事業における調査や、在野の研究者の活躍によって、多くの城郭遺跡が見つかっている。対してなすから地域の側には数が少なく、まだまだ城郭遺跡が埋もれている可能性が高い。今後はとくに、那珂川以東の地域(大木須・小木須など)を中心に、分布調査を継続したい。

[参考文献] 大塚悠暉・高橋修. 2022.



写真1 烏山城跡空撮（南から）

【どんなお城？】

烏山城跡は、今からおよそ800年前におきた源平合戦（治承・寿永の乱）における屋島の戦いにて、扇の的を射落とした那須与一で有名な那須氏の時代から続く城跡である。

『那須記』等の古記録によると、約600年前の応永25（1418）年、那須氏一族の沢村五郎資重によって築城されたと言われている。それ以後、天正18（1590）年に当主の那須資晴が、小田原遅参を理由に豊臣秀吉によって改易されるまで那須氏の居城である。

戦国時代末～江戸時代中期にかけて、織田氏、成田氏、松下氏、堀氏、板倉氏、那須氏、永井氏、稲垣氏と頻繁に城主の交代が行われ、万治2（1659）年、時の城主であった堀親昌によって、城の東山麓に新たな居館（三の丸）が築かれ、以後の藩政機能はこちらに移ることになった。

享保10（1725）年になると、譜代大名の大久保常春が近江国（現在の滋賀県）から移封され、その後8代、約140年にわたり大久保氏が城主となり、城は明治時代を迎え廃城となった。

【どこにあるの？】

烏山城跡は、栃木県東部に位置する那須烏山市に所在する広大な城跡である。地元では八高山（標高206m）と呼ばれる山の山頂付近を造成し城が築かれている。

那珂川西岸の河岸段丘上の狭い平坦面に那須烏

山市烏山地区の市街地が形成されており、その西側に広がる喜連川丘陵の一支脈に城が築かれている（写真1、図1）。丘陵東側を大きく蛇行して南流する那珂川、丘陵西側を南流する江川に画され、北側の丘陵地帯は大小の谷が複雑に入り組んでおり、地形が険しく、守りに有利なことを巧みに利用した要害の地を選んで築城された城跡である。



図1 ●が烏山城跡（上方向が北）

【どんな構造？】



写真2 吹貫門脇石垣（南西から）

烏山城跡は、喜連川丘陵の独立した丘陵頂部を中心に「五城三郭（①本丸、②古本丸、③中城、④北城、⑤西城、⑥大野曲輪、⑦若狭曲輪、⑧常盤曲輪）」と呼ばれる曲輪群が存在している（図2）。曲輪群の周囲には堅堀や横堀、堀切、土塁などが複雑に設けられ、本丸周囲には石垣（写真2）

を築くなど堅固な城である。またこれらの曲輪群は、虎口（出入口）の配置や井戸の位置、通路などから、それぞれの曲輪の独立性が高いと想定でき、古い段階では群郭式ぐんかくの山城であった可能性もある。



図2 縄張図（茂木孝行氏作成一部分）

【調査の成果】

本丸の調査では、薄い腐葉土を除去すると写真3のような建物の土台となる礎石がたくさん確認された。西城では、腐葉土の下から平に整地された面が確認され、さらにその下には曲輪内を区画する溝が確認された（写真4）。これは曲輪内を使用状況によって改修していた証拠である。

使用していた時期については、発見された出土品により検討をすすめた。

古いものでは、室町時代に輸入された白磁や青磁の破片や、地元産のかわらけ（写真5）も発見されている。出土品は、江戸時代の国産陶磁器（写真6）など比較的新しいものも様々発見されている。

【まとめ】

烏山城跡は、那須烏山地域の中心として使われていた広大な山城である。

室町時代（15世紀後半）から明治時代（19世紀後半）までの、およそ400年の間という長い期間に、いろいろな改修をされながら継続して使われていたことがわかってきた。

使用頻度や残存状況から、中世城郭と近世城郭

の両方を見ることができ、その変遷を陶磁器などの遺物や石垣などの遺構からも追うこともできる貴重な城郭であることがわかった。つまり、烏山城跡に1度訪れると、2度おいしい城跡である。



写真3 本丸で見つかった建物の礎石



写真4 西城で埋め戻されていた区画溝



写真5 かわらけ（土師質土器）



写真6 江戸時代の陶磁器（肥前）碗

【烏山と那須氏】

那須氏は、藤原道長のひ孫の須藤貞信に始まるとされる一族で、屋島合戦の「扇的」で有名な那須与一宗隆を輩出した名族である。

鎌倉時代や室町時代の那須氏は、高館城（現在の大田原市大輪）や黒羽城（現在の大田原市前田）を拠点とし、下野国北部の最大勢力として活躍した。特に、那須資光は源頼朝に弓馬の達人として認められ、那須資忠や那須資藤は足利尊氏の忠臣として活躍した。

ところが那須氏は、応永21年（1414。室町時代）までに分裂した。一説によると、兄弟不和が原因という。この時、弟の那須資重は沢村城（現在の矢板市沢）から烏山に逃れた。そして、烏山城を築いて本拠としたという（烏山城についてはⅢ－8参照）。

ちなみに、烏山城に本拠を置いた弟（那須資重）の系統を下那須氏、黒羽に本拠を置いた兄（那須資之）の系統を上那須氏という。

この資重以降、烏山城は戦国時代を通じて那須氏の本拠地となり、下野国北部の重要な拠点となった。

戦国時代や江戸時代に烏山城を本拠地とした那須氏の当主は、10人いる。この内本節では、特筆すべき3人の事績を紹介する。

【那須資房】

那須資房は、分裂した那須氏を統一した下那須氏の当主である。

永正11年（1514）、周辺勢力との抗争や家督争いによって上那須氏が滅亡すると、上那須氏の所領は領主のいない空白地帯となった。この所領を手にしたのが、資房であった。延宝4年（1676）に記された『那須記』によると、上那須氏の家臣であった大田原氏や大関氏から旧上那須氏領の主となるよう申し入れがあり、資房はこれを承諾した。この結果、資房は勢力を拡大し、分裂していた上那須氏と下那須氏は統一された。

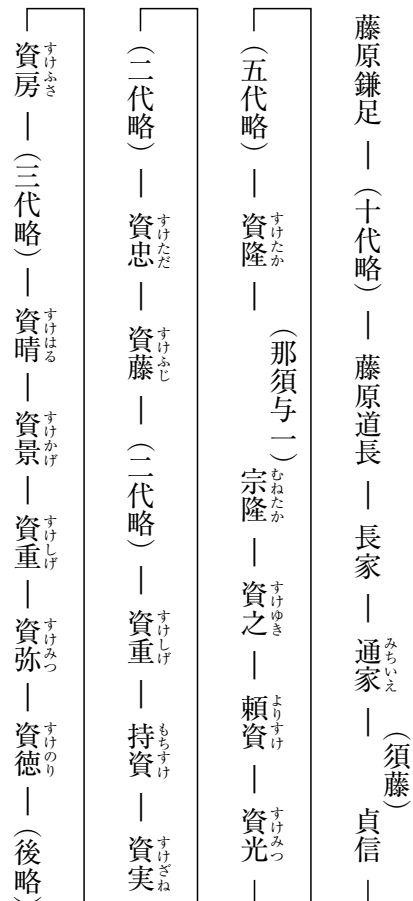
また、資房は、旧上那須氏の所領に攻め込んだ岩城常隆と戦い、山田城や縄釣台で勝利したという。

資房は、天文21年（1552）に亡くなったとされる。資房を含む6人の那須氏当主の墓が、今も天性寺にある（写真1）。



写真1 天性寺にある那須家六代の墓（市指定史跡）

● 那須氏系図



【那須資晴】

那須資晴^{すけはる}は、那須氏の最大版図を築いた戦国時代末期の当主である。その石高は、6万石とも8万石ともいわれている。

戦国時代後期の関東地方は、小田原を本拠地とする北条氏と反北条氏勢力に二分していたが、資晴は基本的に北条氏と同盟を結び、領土を接する反北条氏勢力の宇都宮国綱^{うつのみやくにつな}と争った。特に天正13年(1585)には、薄葉ヶ原の戦い(現在の大田原市薄葉周辺)で宇都宮国綱に勝利し、勢いに乗って南下し、喜連川や宇津野(ともに現在のさくら市)など宇都宮氏領を攻略した。さらに資晴は、伊達政宗と同盟を結び、那須氏・北条氏・伊達氏で結束し、生き残りを図った。

しかし資晴は、天正18年(1590)に豊臣秀吉からの小田原参陣要請に応じなかったため、同年7月末頃に秀吉によって所領と烏山城を没収された。『那須記』によると、改易された資晴は、烏山城から宮原八幡宮に退去し、その後佐良土館(現在の大田原市佐良土)へ移ったという。ちなみに那須氏は、同年8月4日から6日の間に資晴の子・藤王丸(後の資景。この時数えて5歳)が小田原から会津へ下向する秀吉に大田原城で対面し、その罪を許されて所領を拝領した。ただし、この時拝領した所領は福原(現在の大田原市福原)を中心とした5,000石で、烏山城は織田信雄(織田信長の二男)に与えられた。

資晴は烏山に戻ることを望み、慶長8年(1603)には宮原八幡宮に願文を送っている。その中で資晴は、烏山に戻った暁には宮原八幡宮の御殿を筑紫山へ移し、楼門や廻廊を建てると誓っている。しかし資晴の夢は叶わず、烏山へ戻ることも無く慶長14年(1609)に亡くなった。

【那須資弥】

那須資弥^{すけみつ}は、江戸時代前～中期の当主で、烏山藩主となった人物である。

資弥は、下野国芳賀郡高島村(現在の栃木市大平町)の青木利長の息子で、姉は4代将軍・徳川家綱の母親・お楽の方であった。そのため資弥は、将軍の叔父として権勢を強めていった。慶安

5年(1652)に那須資景の養子となり、家督と5,000石の所領を継承すると、寛文4年(1664)には那須藩1万2,000石の大名となった。そして、延宝9年(1681)には烏山藩2万石の大名となった。那須氏は、資晴の改易から91年ぶりに烏山に戻って来た。

烏山藩主となった資弥は、領内の泉溪寺、一条院、愛宕別当、天性寺、太平寺(正眼寺)(写真2)の所領を安堵している。また、天和3年(1683)には津軽藩主の津軽信政から養子を取り、那須資徳^{すけのり}と名乗らせ跡継ぎとした。資弥は貞享4年(1687)に亡くなり、浄名院(現在の東京都台東区)に葬られた。



写真2 滝の太平寺

【その後の那須氏と烏山】

資弥没後、すぐに養子の資徳が那須氏の当主となった。しかし、資弥の実子を称する福原資寛^{ふくわらすけひろ}が「資徳の家督相続は不当」と幕府に訴えた。そのため幕府は、「実の子がいながら養子に家督を継がせるのは不当だ」と裁定(不法養子の罪)を下した。資徳は改易され、その身は実家の津軽家に預けられた。家督相続から、僅か3か月後のことであった。

資徳は、元禄13年(1700)に罪を許され、翌年には福原(現在の大田原市福原)1,000石を与えられた。

その後の那須氏は、福原1,000石を有する旗本(交代寄合)として存続し、明治維新を向かえた。一方で資徳改易後の烏山には、永井氏や稲垣氏、大久保氏といった譜代大名が入った。しかし、烏山に那須氏が戻ってくることは無かった。

今回は、烏山城主・那須氏について3人の事績を紹介した。この他にも、那須烏山市内には那須氏にまつわる様々な史跡や逸話が遺っているが、それらの紹介はまた別の機会とさせていただきます。

【江戸時代の物流について】

江戸時代に入ると、幕府が置かれた江戸は多くの武士、町人が居住する大都市となった。そのため、この大都市江戸へ米などの食料そして生活物資等を大量に送らなければならなかった。街道が整備されて馬や人力による輸送が発達したが、物資の大量輸送は河川における船等による水運が重要な役割を果たした。そうしたことから、関東では街道とともに河川が整備された。特に、利根川、荒川、鬼怒川といった大河川の流れを大きく変えるような大事業が実行された。その結果、関東と江戸をつなぐ川の道(水路)が主要な物流路となっていた。そして、江戸へ向かう船により、下野を含む関東各地の物資が江戸に集められた。一方、江戸からの戻ってくる船により、江戸に集められた物資を数日で下野の人々も手にいれることができるようになった。

江戸時代の運送力



【那珂川から江戸へのルート】

下野で水運に利用された主な河川は、鬼怒川・思川・巴波川・渡良瀬川そして那珂川である。那珂川以外は、利根川に合流し、江戸川、船堀川・小名木川を通り、江戸へと向かう。ところが那珂川は水路で直接江戸とつながっていない。このため、江戸へとつながるルートは以下の3つが考えられた。

①「銚子入内川江戸廻り」

那珂川～那珂湊～海～銚子～利根川～
関宿～江戸川～船堀川・小名木川～江戸

②「外海江戸廻り」

那珂川～那珂湊～海～房総沖～江戸

③「内川廻り」または「内廻り」

那珂川～那珂湊～^{ひぬま}涸沼川～^{えびさわ}涸沼～海老沢～
＜陸送＞～吉影～霞ヶ浦～利根川～関宿～
江戸川～船堀川・小名木川～江戸

海を通るルート(①、②)は、当時の操船技術からするとかなりの危険を伴った。それ故、那珂川水運のルートとしては、③のルートが選択されることが多かった。ただし、一部陸上での輸送が必要で、その上かなりの大廻りになるため、下野国内の他の河川に比べ日数を要した。



＜内川廻りによる黒羽～江戸間のルート＞

陸上輸送区間については、江戸時代に解消すべく常陸国の涸沼から霞ヶ浦の北浦に至る壮大な運河建設計画を考える者もいた。これが実現すれば、那珂川水運の陸上輸送区間が解消され、水運可能な区間が飛躍的に伸び、物流に大きく影響を与える計画であったが、残念ながら実現することはなかった。

【那珂川で用いられた川船】

那珂川で用いられた川船は、川下ヶ船・歩行渡船・馬渡船そして^{はしけふね}舢舨船・^{こうかいふね}小鷓飼船であった。前者は、渡し船等、日常生活に使用されたので、水運

には後者の舢舨船・小鵜飼船が用いられた。

江戸時代の記録によると、舢舨船は長2丈5尺(約7.6m)・横3尺(約90cm)とあり、小鵜飼船は、長さ4丈1、2尺(約12.8m)・横7、8尺(約2.4m)とある。特に、那珂川の小鵜飼船の棚板の深さは、70cm弱と比較的深かったため、「胴高船」とも呼ばれた。

黒羽から水戸へ船で下った際の日数については、水量が多い夏は約2日間であったが、冬は水深が浅いためそれより多くかかった。一方、水戸から黒羽へ上っていく船は夏、南風が吹く時には、約3日間、風がないときには風を待って帆をはって上っていく関係で時間を要した。冬には、北風(向かい風)が吹くため、より時間を要したという。



<大正時代に烏山町付近をさかのぼる胴高船> (個人蔵)

【筏流し】

那珂川には、後背地域として木材資源が豊富な八溝山地がある。このため、木材を筏に組み、川に流して運搬する筏流しが盛んであった。『創垂可継』によると、水量の多い夏が筏流しの最盛期であったことがうかがえる。

杉や檜などの丸太を藤蔓で縛ってつなぎ、長さ約25m、幅3mの筏が組まれる。この筏を三枚つなぎ、筏師が竹棹や櫂などを用いて川を下った。烏山と茂木の境に加波築と呼ばれる急流があり、那珂川の最大の難所であった。加波築を越えた先の大瀬河岸(茂木町)から一日かけて水戸に到達したとされる。

木材は主に水戸で城や城下家屋敷等の普請用に用いられたが、陸上輸送区間を経て水戸藩江戸藩邸まで運ばれることもあった。

【那珂川水運の特徴と今も残る痕跡】

那珂川水運は、黒羽藩・烏山藩等に利用されたが、水戸藩との関係も深かった。これは烏山の北方の武茂地方が水戸藩領だったことによる。水戸藩は武茂領の年貢米及び周辺地域の特産品の水戸への輸送に水運を用いていた。実際、常陸の高部から特産品の紙を烏山から船で水戸へ送っている。このように、那珂川水運は那珂川沿岸地域と水戸をつなぐ役割を果たしていたと言える。

また、延宝5年(1677)の資料に奥州の七藩(白河・会津・二本松・三春・福島・長沼・守山)が、那珂川を介して江戸へ米の輸送(廻米)を行った記録がある。那珂川水運では、沿岸地域だけでなく、東北からの物資も取り扱っていたのである。

ただ、東北からの物資輸送は、主に鬼怒川水運が担っていた。これは那珂川水運と異なり、水路で江戸とつながっていたことが大きい。しかし、鬼怒川水運だけで東北地方からもたらされる物資を捌くには限界があった。そうしたことから、那



珂川水運は遠回りである上に陸上輸送区間があるハンデはあったが、東北地方の物資輸送に重要な役割を果たしていた。

鷲子山上神社には、水戸藩主徳川光圀が撰した鷲子山十景の石碑がある。これに「河川帆景」とあ



<宮原八幡宮の石灯籠>

り、那珂川に浮かぶ帆掛船の風景が想起される。また、烏山の宮原八幡宮と太平寺には、江戸の紙商人達が寄進した石灯籠と石段が現存する。これらのことから、江戸時代の水運と烏山そして江戸とのつながりを現在でも確認することができる。

那須烏山市内ではおよそ1,000箇所もの遺跡があるが、発掘調査が実施され、詳細な時代や実態がわかった遺跡や、「史跡」として指定され、保護・活用をされているものはほんのわずかである。

「史跡」という言葉は狭い意味でいうと、「国」が「文化財保護法」という法律を基に指定した、いわゆる「国指定」をさす。市内では、この「史跡」は鴻野山地区にある「史跡長者ヶ平官衙遺跡附東山道跡」というものが当てはまっている。

今回は、狭い意味でとらえずに市が指定した「市指定史跡」や、指定は受けていないが発掘調査が行われた遺跡なども紹介する。

(1) 市指定史跡

【大和久古墳群】 那須烏山市南大和久

「大和久古墳群」は、寺田・原の前・林先^{はやしき}など、複数の古墳群（支群）の総称である。以前は30基を超す古墳が存在したが、開発により、林先支群^{はやしきしぐん}の前方後円墳2基、円墳3基が残存するのみである。

寺田支群は社会福祉法人大和久学園の建設に伴い、原の前支群は開発に伴い発掘調査が実施され、鉄剣^{まがたま}や勾玉、耳飾りなどが見つまっている。

これらの調査により、古くて6世紀前半には大和久古墳群が造られ始め、7世紀代まで続いていたことがわかった。



【曲田横穴墓群】 那須烏山市曲田

「横穴墓」は崖や斜面に穴を掘る古墳の形のひとつである。

ここでは凝灰岩^{ぎょうかいがん}というやわらかい岩をくり抜いて作られている。6基の横穴墓が確認されており、この地域には曲田横穴墓群を含めて3群の横穴墓群が確認されているが、曲田横穴墓群はその中でも一番保存状態がよく、大きな規模をもっている。

立地や地形から考えると、この横穴墓群の東側にはまだ発見されていない横穴が存在する可能性があるとされている。



【中山横穴墓群】 那須烏山市中山

曲田横穴墓群と同様に凝灰岩というやわらかい岩をくり抜いて作られている。

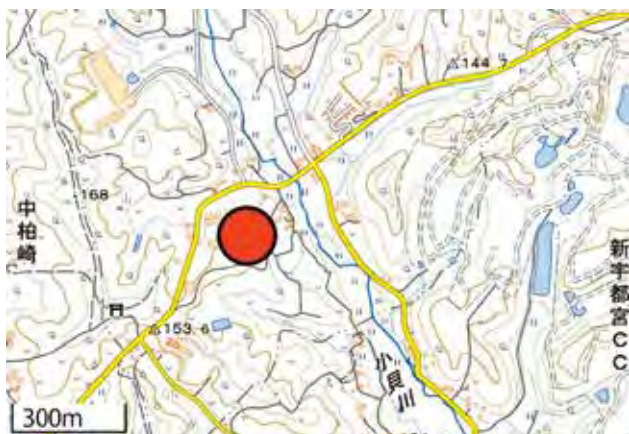
古い記録には5基の横穴墓が存在するとの記述があるが、現在は2基しか確認できておらず、保存状態がよいものは1基のみである。

天井部分には棟木^{むなぎ}のような凸^{でこ}があり、アーチ状の屋根のような形をしている。この屋根のような形は那珂川町にある「史跡唐御所横穴^{からのごしょよこあな}」と似ている。



(2) 未指定の遺跡

【曲畑遺跡】 那須烏山市曲畑



(地図：国土理地理院地図を改変)

民間開発に伴う発掘調査が行われ、縄文時代中期(およそ5,000年前)の環状集落であることがわかり、建物跡と食物を貯蔵したと考えられる土坑が多数発見された。

東北や新潟、南関東の特徴をもつ土器や、日本では新潟県の糸魚川でしかとることのできないヒスイでつくったペンダントなどが見つかるなど、さまざまな地域と交易があることがわかっている。

【北原遺跡】 那須烏山市高瀬



(地図：国土理地理院地図を改変)

荒川南部地区の圃場整備事業に先立ち、調査が行われた。

古墳時代前期(3世紀)から平安時代の終わりごろ(12世紀)にかけての竪穴住居跡が180軒以上見つかり、大きな集落であったことがわかっている。特に平安時代前期(9世紀)に最も

集落の規模が大きくなり、^{りよくゆうとうき}緑釉陶器や^{かいゆうとうき}灰釉陶器などの高級陶磁器も見つかっていることから、富裕層の存在を伺うことができる。

【滝田本郷遺跡】 那須烏山市滝田



(地図：国土理地理院地図を改変)

国道294号建設にあたり発掘調査が行われ、縄文時代から奈良・平安時代にかけて99軒の建物跡が確認された。特に古墳時代後期(6世紀)から奈良・平安時代にかけては集落が継続して営まれていたことがわかっており、見つかった建物跡のほとんどを占めている。

【稲積城跡】 那須烏山市下境



(地図：国土理地理院地図を改変)

那須資重が、烏山城を築城する前に居を構えたといわれている城跡である。発掘調査などは行われていないため詳細は不明だが、「御城」「中城」「外城」など城に関わる名前の小字名や、部分的に確認できる土塁などから、区画割りや存在した施設などを推測することができる。

那須烏山市内には、現在、約30ヶ寺の寺院がある。江戸時代にキリスト教の禁止政策と、領民を把握するために制度化された、現在の戸籍と税台帳に当たる記録（宗門改人別帳）によれば、100ヶ寺近い寺院があったと思われる。

一番古い寺は、平安時代初期に建てられたとされる太平寺である。その後室町～江戸時代に増えるが、その多くが1500年代に建てられたものである。

江戸時代後期の天明、天保の度重なる大飢饉により、村人が減少し檀家（信者）も減り、寺の維持が困難になった。住職もいない寺が多くなり、同じ宗派の寺院が兼務して管理をするようになる。統合整理も行われたが、結局は維持できず廃寺となる寺も増えていった。

明治時代になると、神仏分離政策と、仏教を排除する運動（廃仏毀釈）による影響もあり、現在の寺数にまで減った。住職が不在で、ほかの寺と兼務で管理されている寺院は現在でもある。

宗派別には、真言宗、天台宗、浄土宗、浄土真宗、時宗、日蓮宗、曹洞宗がある。城下町でもあった旧烏山町内には多くの宗派の寺院がある。市内全域としては、真言宗と曹洞宗の寺院が特に多く見られる。明治の神仏分離令が出されるまでは、修験道（山伏）の寺もあった。

【太平寺】

龍門の滝の西の小高い場所に建つ。延暦22(803)



太平寺 山門

年に征夷大將軍・坂上田村麻呂が逆賊高丸ぎやくどくたかまるの討伐祈願で千手観音を安置するために建てた。後に慈覚大師円仁じかくだいしえんにんによって再興されたとされる。

高丸は京都の清水寺の縁起（由来）にもある伝説の人物で、鎌倉時代の軍記物語の中での蝦夷征伐えみしに登場し、室町時代の御伽草子などにも引用される。清水寺も田村麻呂の創建であり、本尊は十一面千手観音と共通しており、宗派は異なるが清水寺の縁起が太平寺の由来に取り込まれたのではないかと考えられる。

中世には、古文書に滝寺として見られるが、1585年、黒羽の大関高増おおせきたかますの娘が、茂木の千本氏せんぼんに離縁されたことにより、千本資俊すけとし・資政すけまさ父子が寺に誘い出され千本氏が謀殺される（太平寺の変）。江戸時代、烏山藩主堀親昌が信州飯田へ移る際に、滝田の菩提寺より山門（仁王門）が移築された。龍門の滝の龍門とは、滝の大釜に棲んでいたとされる大蛇（オロチ・龍）が、山門の屋根に七巻き半したとされる伝説による。



蛇姫様墓所

また境内には城主大久保家の特殊墓域があり、川口松太郎の小説、蛇姫様（琴姫）のモデルとなった於志賀姫らの墓や大久保家歴代の位牌が安置されている。

古い絵図には塔が描かれているが、明治時代に兼務で管理をされていた湯津上の光丸山に本堂が移築された（現・光丸山大日堂）頃は、境内に多宝塔があったそうである。

山門（仁王門）や本尊千手観音など多くの文化財がある（非公開）。

【天性寺】

鎌倉初期、那須^{みつすけ}光資が那須与一の法号曹源院を院号として創建。資重が烏山城に移り、寺の拡張により天照寺と改められる。

烏山城主・那須^{たかすけ}高資が、茂木の千本氏に討たれその菩提を弔うために高資の法号より天性寺と改称される。

織田、成田氏の位牌所や、堀家が菩提所として歴代城主により敬われるが、板倉氏の城下町の整備に伴い、現在地に移された。

江戸後期の大飢饉の際には、円応和尚らが二宮金次郎の教えにより、お救い小屋を設けて領民の救済が行われた。現在も二宮金次郎の教えを実践する報徳会により、給仕体験が行われている。

また境内墓地には、那須与一の廟所が祀られ、那須家7代の墓石などがある。



天性寺 那須与一廟所

【泉溪寺】

室町時代に源翁^{げんのう}（玄翁とも）和尚による創建で、元は下境の旧境保育園の東側、解石神社奥宮のある峰の西の麓にあった。

那須に逃れ討たれた九尾の狐が大岩と化し、なお毒気で悩ましていたのを泉溪寺の住職であった源翁和尚の法力をもって、殺生石は打ち砕かれた功績によって、後小松天皇より直筆の額^{ちよくがく}（勅額）を賜った。その10年後に実際に茶臼岳の溶岩ドームが形成される大規模な噴火が起きており、その噴火が殺生石伝承と結びついたものと思われる。

その後、現在の烏山図書館の北西部に寺が移り、門前は泉溪寺町となり、前記の城下町整備により現在の場所へ移された。

本堂には源翁和尚の像が安置されている。

【松倉山観音堂】

大木須と茂木町山内との境の松倉山山頂にある観音堂。田畑の耕作に牛馬を使用していたころは、馬の守護として信仰されていた。

室町時代的那須家の当主らの名が記され県の重要文化財にも指定されている5体の木造の仏像が安置されている。

【木戸不動尊】

小原沢と茂木町との境の那珂川の絶壁に不動明王が祀られている。

古いお堂は焼失し、現在のお堂は再建修築されたものであるが、この辺りでは珍しい京都の清水寺と同じ急な崖に建てられた懸け造りという建築様式の建物である。那須与一の安産祈願の伝説が残っている。



木戸不動尊

市外にあるなすから関係のあるお寺としては、那須氏と佐竹氏の和睦の調停役を務めた金剛寿院（現大田原市福原）があり、戦国時代的那須家関係の古文書が残されている。

大田原市佐良土の光丸山大日堂は、太平寺の本堂が移築されたものであり、近くには小田原合戦の処分により領地を取り上げられた那須^{すけはる}資晴が移った佐良土館の跡なども残っている。

ほかにも地域で信仰されている、藤原鎌足の生誕伝説のある鎌足薬師、日光外山^{かんじょう}から勧請された毘沙門天が祀られ、烏山の市街や那珂川などの景観を見渡せる毘沙門山など仏教に関連するお堂も市内各所に数多く見られる。

2

なすからの神社

栃木県神社庁に約1900社が登録されているうち、約620社が那須地域にある。そのうち那須烏山市内で登録されている神社は約70社である。

江戸時代以前は神仏が同一とされる信仰形態（神仏習合）で、寺が神社も管理をしていたものが多かった。明治維新後は、神仏分離令により寺と神社が明確に分かれ、祭神名や社名も改められた。

また明治から大正にかけて、神社の整理統合（合祀）が行われるなどして、今日に至っている。

生活と関係するあらゆるものを神として祀るために、山林や田畑など多くの場所に小さな祠として祀られている事も多く、実際は神社庁に登録されている数よりもかなり多い。

なす八溝地域の特徴としては、温泉神社、八幡宮、熊野神社が特に多い傾向にある。那須地域に多い温泉神社は、市内では1社のみである。

【八雲神社】



八雲神社

かつては、お仮殿が置かれる場所にあったが、大正時代に現在の場所へ遷された。

境内には、和紙問屋が奉納した石灯笼がある。

市内中心部に鎮座し、付祭りである山あげ行事は、ユネスコ無形文化遺産になっている。

1560年、烏山城主那須資胤が、天下泰平・疫病退散を祈願して大桶の牛頭天王を、現在の仲町十文字（御仮殿を設営する場所）に勧請された。

明治の神仏分離政策により、社名を八雲神社へ、祭神を素戔鳴尊に改められた。社名は素戔鳴尊が詠まれた「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣作るその八重垣を」日本最初の和歌とされる歌から採られた。

【宮原八幡宮】

795年に坂上田村麻呂が蝦夷征伐祈願のために、九州宇佐八幡宮を筑紫山（城山と毘沙門山の間）に勧請、筑紫山八幡宮として戦勝祈願をしたのが始まりとされる。

807年（大同2）、筑紫山より琵琶原（現在の宮原）へ遷され、地名が宮原と変えられ、社名も宮原八幡宮と改められた。

代々の烏山領主の崇敬を受けたことは、華やかな彫刻を施した社殿や社宝からも伺え、惣社八幡宮とも称されていた。八雲神社が現在地に遷されるまでは牛頭天王社（八雲神社）の神輿渡御は、八幡宮から天王社まで行われていた。

【鳴井山加茂神社】



鳴井山梵天奉納

通称鳴井山、鳴井さんとも称される。

和銅4年に山城国（京都）賀茂別雷神社（上賀茂神社）を勧請したとされ、祭神は別雷大紙で、市内でも創建が古い伝承を持つ神社である。

栃木県内には雷神を祀る神社が約200社あるが、賀茂神社は、戦前の神社の格付けでは雷神社の中

で最高位であった。

落雷除け、突風・雹除けおよび雨ごいの信仰が篤く、24ヶ郷の総鎮守として崇敬されている。その信仰範囲は茂木町やさくら市、矢板市、大田原市、ほか県外にもおよび、講社を結成して参拝が行われている。

鳴井山の名称は、鳴神＝雷鳴と、神社参道脇に豊富に湧水が出ており、そのコンコンと湧き出る様を掛け合わせたものである。

月次の鳴井さんが篤い信仰を受けたのは、この辺り一帯が葉タバコ栽培が盛んであり、葉タバコが突風や降雹の害を受けやすいこと、また辺りの水田を潤す河川の水脈が浅く日照りの害を受けやすかったことが背景にある。

令和元年まで梵天奉納が行われていたが、諸事情により、奉納が中止されることになった。

【稲積神社】



稲積神社の佐々良獅子舞

那須家の城である稲積城外城跡に祀られている神社である。

平治の乱（1160年）の折、那須資満、資清父子は源義朝に従って平清盛と戦ったが敗れて討ち死に。資清の子、宗資と資房は平家の追及を逃れて、甲斐国（山梨県）に稲積庄に隠れ、鎮守稲積大明神に国へ戻れるようにと一心に祈願した結果、許されて那須へ戻ることができた。

それにより甲斐国より稲積明神を勧請して、鎮守として祀り、城の名前も稲積城としたとされ、一説には那須与一が産まれたとの伝説も残り、那須家ゆかりの神社としては重要な神社であったと

考えられるが、那須資隆の代に稲積城から他へ移ったとされ城、神社の伝承もないため詳細がわからない。

稲積神社には、小泉斐の描いた絵馬など文化財に指定されている絵馬が多く奉納されており、また二百十日近くにはささら獅子舞が奉納され参拝者で賑わいを見せることから、人々の信仰が厚かった神社であったことが伺われる。

【寿亀山神社】



寿亀山神社 大久保常春木像・宮殿

烏山城三ノ丸跡に鎮座する、烏山藩主大久保常春を祀った神社。

大久保常春は将軍徳川吉宗の信任も厚く、若年寄、老中などを歴任した。常春が病没した際に、吉宗が常春の死を悼み、作らせたとされる木像と厨子が安置されている。

元は城中などで祀られていたものを、明治12年に旧藩士たちによって神社が建てられ、ご神体として祀られるようになった。

ここで紹介した5社以外にも、獅子舞が奉納される日枝神社や、那須の殺生石が飛んできたとされる解石神社、烏山城へ攻めてきた常陸の佐竹氏を追い返したとされる旗持稲荷といった伝承が残る神社が、那須烏山市内に数多くある。

【ユネスコ無形文化遺産】

山あげ行事とは、歌舞伎芝居の舞台背景用の大きな山が、若衆たちの手で見事にあげられ、見る人の感動を呼ぶところからついた名である。

鳥山の山あげ行事は、国指定重要無形文化財であるとともに、2016年(平成28年)、「山・鉾・屋台行事」としてユネスコ無形文化遺産に登録された。山あげ行事は、日本はもとより世界に誇れる行事である。

【八雲神社の勧請】

神様を招いてお祭りすることを勧請という。八雲神社の勧請は、永禄3年(1560)とされる。城主那須資胤は、疫病が流行り亡くなる人があとを絶たない有様を見て、疫病除けとして大桶村より牛頭天王を現在お仮屋が設けられている十文字の所に勧請したという。

ところで、牛頭天王ごずてんのうとは、もとインドの神様で、祇園精舎ぎおんしょうじゃの守り神つかさどといわれ、日本では疫病を掌る神様とされた。また、日本ではかつては神と仏が一体化され、牛頭天王は日本の神様の素戔鳴尊すさのおのみことと同一視された。勧請した当時は、仏教を重んじる傾向が強く、牛頭天王をご祭神として祀り、神社を祇園社とか天王社といった。それが明治時代になると、日本は神の国であるとして神仏分離令が施行され、牛頭天王に代わって素戔鳴尊を祀り、神社の名前も鳥山の場合、八雲神社と改められた。



十文字の所に設けられたお仮屋

【付祭りの始まり】

神社の祭りには、本祭りと付祭りつけとがある。神主が中心となって行う祭りを本祭り、氏子町人が中心となり屋台や山車などを奉納する祭りを付祭りという。山あげ行事は、付祭りである。

八雲神社の付祭りを詳しく記したものに『赤坂町祭礼記録』がある。赤坂町とは、現在の泉町で、赤坂町に住んでいた「宮下」と「溪梅軒蘇」と名乗る二人が記したもので、八雲神社の付祭りの由来と変遷を知るのに大変参考になる。これによると今のような山あげ行事は、八雲神社が勧請された当初から行われていたわけではない。

付祭りが開始されたのは江戸時代正保元年(1644)で、町人町である鍛冶町、元町、金井町、赤坂町、仲町が、相談の上十文字において人形芝居や相撲、神楽、獅子舞を行ったのが始めとされる。

寛文7年(1667)には、踊りが開始され、付祭りが1年おきに実施されるようになった。延宝元年(1673)には、屋台が出る。この屋台は踊りが出来るようなものではなく、踊りは踊り、屋台は屋台と併存したものである。

このように踊りが盛んであったが、元禄4年(1691)頃から所作、いわゆる歌舞伎芝居が行われるようになった。以後、歌舞伎芝居が盛んになり、踊りは衰退する。

元禄14年(1701)には、仕掛け屋台が登場する。仕掛け屋台とは芝居屋台のことであり、仕掛け屋台での歌舞伎芝居が付祭りの中心となっていった。

【山の登場と鳥山独特の屋台の誕生】

正徳5年(1715)には、大山が作られた。山の登場である。享保4年(1719)には、山の高さが1丈8尺(約5m40cm)もある大型のものが登場し、さらに山が崩れるなど手の込んだ仕掛けが用いられるようになった。山は割った竹あじろを網代に編み、その上から和紙を貼ったもので、こうした和紙を

貼ったものをハリカという。和紙を大量に使う山は、和紙の産地烏山ならではのものである。

大きな山の登場により、舞台も広がった。舞台には屋台が用いられる。烏山の屋台は、二輪であり、しかも前部の彫刻を施した御拝は台部ごはいから取り外せる。二輪は舞台を作る際の操作がしやすい。その上、御拝と台部を分解することで、御拝を舞台の飾り、台部を舞台として使用できる。ここに屋台が舞台に早変わりするという烏山独特の屋台が誕生したのである。



大山をあげる若者たち

【日本一の野外劇】

現在、山あげ行事は、氏子町内の路上を会場に行われている。会場は客席側から舞台、舞台に向かって左側奥に御拝、右側に常磐津語り場の座敷が置かれる。その奥には松波、館、前山、中山、大山などが続く。舞台前面から大山まで約100mにも及ぶ。

山あげ行事期間中は、多い時で1日6回場所を移動して歌舞伎芝居を上演する。その都度、舞台はもとより山を分解しては組み立てる。山あげ行事は、前夜祭を含めて4日間行われる。酷暑の中で山あげを行うのは実に大変なことである。山あげ行事が日本一の野外劇といわれるのは、会場の規模もさることながら、大変な作業や芝居が見事になされるところにもある。

【山あげ行事を支える若衆座と芸能部会】

山あげ行事のおもな担い手は、その年の当番町（鍛冶町、元田町、金井町、泉町、仲町、日野町が6年ごとに当番）の若衆座と芸能部の人々であ

る。各町内の若衆座は、若衆世話人(4人)・木頭きがしら(1人)・副木頭(2人)・若衆(複数人)からなる。若衆世話人は若衆座の代表者、木頭は山あげ行事全体の指揮者、副木頭は補佐役である。若衆座は昔から伝わる組織で、指揮命令系統が明確である。これが複雑な作業を短時間に行う山あげ行事を可能にしたのである。

一方、芸能部は、若衆座とは独立して組織されるもので、踊り・芝居と常磐津語りの者からなる。

【真夏の到来を前にして山あげ行事の本番】

山あげ行事は、八雲神社の祭礼にあわせて行われる。祭礼は現在、7月第4土曜日を中心にして3日間行われる。なお、本番前に山あげ行事の前夜祭が行われるから山あげ行事は都合4日間となる。前夜祭を「笠揃かさぞろえ」といい、余興として「子宝三番叟こだからさんぼそう」が演じられる。本番初日は、お仮屋うつに遷された神様に山あげ行事を奉納することから始まり、これを「天王建」という。初日、2日、3日目は、当番町内を始め「訪問」と称して各町内でも山あげ行事が演じられる。芝居の演目には人気のある「将門」、「戻り橋」、それに地元の伝説をもとにした「蛇姫様かさぬき」が演じられることが多い。3日目の最終日を「笠拔」という。神様を乗せた神輿がお仮屋から神社に戻る日で、午後10時、神輿が神社に戻る直前で最後の山あげ行事が演じられる。演目は「関の扉せきのと」と「老松おいまつ」であり、これで4日間にわたる山あげ行事が閉じる。

山あげ行事にかけた氏子町人のあくなき熱意、ユネスコ無形文化遺産の名に恥じない。



人気の「戻り橋」を演じる 左奥は「御拝」飾り

4

ししまい かぐら
なすからの獅子舞・神楽

那須烏山市には、ユネスコ無形文化遺産に指定されている「烏山の山あげ行事」をはじめ、1件の国選択無形民俗文化財と5件の市指定無形民俗文化財が現在も継承されている。

市内には、「龍門の滝」や「お城を救った牛と蛭」など約112点の民話が伝わる。

(1) 天祭

天祭とは、太陽や月をはじめとする信仰に、念仏が結びつき風雨順調、五穀豊穡などを祈願する行事で、天念仏とも言われ、県内各地で行われている。

【塙の天祭】(国選択無形民俗文化財)

塙の天祭行事は、享保年間(1716~1736)に三箇の松原寺を開山した出羽出身の鳥海上人が伝えたとされている。従来、二百十日を中日とする二夜三日にわたって行われていたが、最近では9月1日に最も近い日曜日に開かれるようになった。松原寺境内に仮設の天小屋を組立て神主と僧、行人(出羽三山に詣でた人が務める)が二階の天棚に上って神仏に祈り、前の舞台では、笛や太鼓の演奏に合わせて天祭踊り(現在では地元の小中学生による)を披露する。



(2) 太々神楽

太々神楽とは、神社の祭りにおいて、神に奉納するために奏される歌舞である。

【熊田太々神楽】(市無形民俗文化財)

熊田の熊野神社で10月中旬に行われる例大祭に奉納される神楽で、熊田太々神楽保存会の会員によって演じられる。近年では熊田の西公民館を会

場に開かれている。

明治初期に伊勢神宮で学んできた神主によって伝えられたのが始まりといわれている。各家の当主の間で口伝の形で伝承されてきたため、楽譜や書き物の類はないが、初期の形がそのまま保存会によって継承されている。神楽は、岩戸神話に基づく31番の舞があり、ゆったりとしたものから荒々しいもの、さらにコミカルな舞がある。素朴な中に優雅さがあり、庶民的な舞楽の面白みを備えている。



【宮原八幡宮観世流太々神楽】(市無形民俗文化財)

宮原八幡宮に伝わる神楽で、舞は36座あり、昔は3日3晩踊ったとされている。現在は、9月中旬に行われる宮原の敬老会で、多種多様な舞を演じている。各演目の舞は口伝秘法だが、「神代舞御神楽式書」という記録を参考にして習得・継承されている。明治17年(1884)、宮原八幡宮祠官の齋藤松寿が伊勢神宮権禰宜退官の際に、神代舞神楽の面と用具(太鼓・大拍手・笛、衣装など)を譲り受けて帰郷し、神楽の発起人となった。当初は、神主の齋藤主膳を師匠とし、氏子が習得して



例大祭（9月15日）に奉納していた。一時は、後継者難のため中断したこともあったが、昭和58年（1983）に「宮原八幡宮太々神楽保存会」が結成され、年齢層ごとに後継者も育成されており、今では定期的に練習を行い、地域の催事などでも舞を披露している。

（3）獅子舞ししまい

獅子舞とは、笛や太鼓の音にあわせて獅子が舞い踊るものである。那須烏山市では、ささら獅子舞ともいわれている。

【森田の獅子舞】（市無形民俗文化財）

当地の獅子舞は小埞館（森田陣屋）を拠点として森田郷を支配していた大田原氏が、災害が続き民心が動揺していたため、弁財天を祀って民生の安定と五穀豊穡を祈願したのが始まりとされている。

弁財天祭礼は、従来旧暦の7月25日～27日（現在は8月下旬）に行われ、夜間神輿の渡御の後、獅子舞が奉納される。獅子舞は一人が一匹を担当し、腹にくくりつけた太鼓を打ちながら、3人一組で踊るといふ関東地方に多い一人立ち三匹獅子舞の形式である。2頭の雄獅子が雌獅子をめぐる争うさまが笛の音に合わせて優雅に演じられ、途中には「おかめ」と「ひょっとこ」が登場する滑稽な場面も挿入され、見物人たちの笑いを誘う。



【興野ささら獅子舞】（市無形民俗文化財）

市内興野地区と大沢地区の鎮守である日枝神社の例大祭に奉納される獅子舞。天保年間（1830～1844）に、武茂領片根地区（現：那珂川町）に継承されていたものを、師匠の武茂久治という人が興野に来てその技を伝え、奉納するようになったものと伝承されている。現在は、興野上・中の5

自治会が輪番制で行い、毎年10月第3日曜日に豊年と災厄退散を祈願して奉納している。3頭の獅子（大獅子・雌獅子・中獅子）が太鼓の音曲に合わせて腰太鼓を打ちながら、「花かご」、「庭見」、「いねむり」など10番を舞い、その間に道化（ひょっとこ・おかめ・ひょうふき）が興を添える。獅子を舞う子どもは毎年、興野全地区内の小学4～6年生の中から選ばれる。



【下境佐々良獅子舞】（市無形民俗文化財）

稲積神社二百十日祭の前日、8月31日（現在は8月最終日曜日）に、国土安穏と五穀豊穡を祈願して「渡りびょうし」など15種目の舞と佐々良歌が奉納される。かつては水神様、天神様及び氏子の氏神様、村役宅でも奉納されていた。現在は、下境地区の4つの組の輪番制で行い、当番地域の協力体制によって継承されている。稲積神社元宮司の口伝記録（天明3年）によると、江戸時代中期の宝暦元年（1751）、当地に移住した個人の所有だったが、明治初期に大字下境に委譲された。昭和35年（1960）からの20年間は、諸般の事情により中断していたが、継承・保存の意向が高まり、昭和62年（1987）に「下境佐々良獅子舞保存会」の会則が定められ、当番一巡後の平成元年（1989）に同会が発足して再興した。



【伝承文芸とは何か】

口から口へと語りつないできた伝説や昔話などの民間の文芸を「口承文芸」と呼ぶ。それを記録したものを「書承文芸」とも呼ぶ。現在はその両方を含めて「民話」とも言うが、ここでは「伝承文芸」と呼ぶことにする。

伝承文芸は、古代から現代まで、それぞれの時代を生きた人々の喜怒哀楽を様々な物語にして語りつがれてきた。ある地域で印象に残った物語は、道や海辺を伝わる。

古代の東山道駅路が通っていた南那須地区や那珂川が流れる下境地区は、交通交易の重要拠点であった。そうした大事な場所には、さまざまな所から多くの人々が群れ集まり、活発な情報交換が行われる。耳に残る物語は、地域の人々の間でも語りつがれ記録される。

【那須烏山に残された伝承文芸 ①放下僧】



放下僧館跡（大里）

南那須の牧野勝重という武将が上州（群馬県）の伊香保温泉で相模（神奈川県）の利根信俊という武将と言い争いになり、勝重が信俊のだまし討ちに会い殺されてしまう。

勝重には、次郎丸と小次郎という二人の息子がいた。二人は^{ほうかそう}放下僧という旅芸人に姿を変えて、宿敵の利根信俊を追う。やがて、武州金沢の三嶋明神の境内で信俊にめぐり合い、見事討ち果たす。これを聞いた烏山城主の那須五郎之隆^{ゆきたか}が深く感動し、次郎丸に領地を与えて牧野家を再興させる。

小次郎は僧侶になって父の霊^{しの}を偲んだ。二人の墓は善念寺に残る。

この話は、謡曲（能）『放下僧』になり室町時代から江戸時代に全国に知られた。現在は「放下僧館跡」（市指定史跡）として残り、『曾我物語』などとともに仇討物語として伝わる。

【那須烏山に残された伝承文芸 ②殺生石】

延暦2（783）年、奥州征伐の勅命を受けた坂上田村麻呂が寿亀山に宿す。夢に千手観音が現れ「山城国音羽山から汝を守護してきた。即、賊を討て。」と告げる。田村麻呂は奥州を平定し寿亀山に千手観音を安置、人々は田村堂と崇めた。

仁安3（1168）年、稲積城主那須資房^{すけふさ}が城の鬼門の地（下境）に寺を造営、寿亀山から千手観音を^{うつ}遷し田村寺とした。延文5（1360）年、那須資世^{すけよ}が観音に詣でると、白髪の老人が「高僧が明日ここに来る。^{ぼだい}菩提を求めよ。」と告げて消える。

高僧は源翁禅師であった。資世は、寺に迎えようとするが、源翁禅師は辞退する。ところが、山川が鳴動し山中より泉が湧き出す。田村寺は泉溪寺と改名され、近郷近在の信仰を集めた。

元中2（1385）年、源翁和尚は那須岳の殺生石に^{こも}籠る白面金毛九尾の狐の霊を調伏、持参の杖^{つえ}で岩を打つと三つの火の玉となって飛び散り、一つが下境の^{とげし}解石神社の奥宮となった。

功績は後小松天皇に聞こえ「大寂院法王禅師」^{だいじゃくいんほうおうぜんじ}の勅号を賜り勅願所^{ちよくごう たまわ ちよくがん}として五峰山大寂院泉溪寺と称した。（『泉溪寺縁起』より）

那須烏山の殺生石伝説は、那須町湯本の殺生石伝説と異なり、古代の



解石神社奥の院（下境）

東山道駅路や中世の那須氏の歴史を強調している。実在した源翁和尚の高僧ぶりを語るのは、禅宗を庇護した武士の宗教意識や戦国時代から室町時代の烏山が全国で重視されていたことも意味している。

【那須烏山に残された伝承文芸 ③蛇姫様】

烏山小町と言われたひのき屋の一人娘すがは、大久保家三万石の琴姫様に仕えていた。家老の佐伯左衛門は、城主の留守に密貿易で私腹を肥やそうとしていたが、江戸幕府の隠密も動き出し本家（小田原）でも梶原一刀斎に実態を探索させる。

ある夜、琴姫はひのき屋で待つ一刀斎に大切な密書を渡すようすがに託す。家老の佐伯は、自分の悪事を隠すため琴姫の身辺を見張らせていた。佐伯の息子源之助に切りつけられたすがは密書を必死に守る。すがの手から密書を奪い取ろうとした源之助の腕に、どこからか現れた黒蛇が噛みつく。激痛に密書を落とす源之助。まもなくすがも息絶えて、密書は佐伯一派の手に渡ってしまう。

城中の琴姫は、不安の内に床に就く。その夢に血まみれのすがの姿。はっと起き上がる琴姫をじっと見守る黒蛇。その後、佐伯一派の悪だくみは琴姫自身にも及ぶが、常に黒蛇が現れて琴姫を救う。琴姫は蛇姫様と呼ばれ、黒蛇は烏蛇と佐伯一派が恐れた。すがの化身である烏蛇に守られ、梶原一刀斎、すかの兄千太郎、千太郎を慕う旅芸人のお島と一座の協力もあり、琴姫は佐伯左衛門の悪事を暴く。（映画化された『蛇姫様』のあらすじ）

原作は、悪徳家老の酒乱息子に伯父を殺された千太郎を主人公にした仇討物語に烏山城のお家騒動をからめた、戯曲作家川口松太郎の時代小説（昭和14年10月から15年7月まで、東京日日新聞連載）である。第二次世界大戦後、「お島千太郎」物として映画や演劇になったり、流行歌「蛇姫様」（唄美空ひばり 作詞石本美由起 作曲古賀政男 昭和40年〔1965〕）になったりと、烏山は現代においても全国に知られた。

原作者の川口松太郎は、明治32年（1899）東京市浅草今戸町生まれ。洋服屋や警察署の給仕などを経て、大正4年（1915）の夏から約一年間祖母井郵

便局（芳賀町）の通信技師として勤務。同年久保田万太郎（小説家・劇作家・俳人）に師事し小山内薫門下となる。

大正12（1923）年の関東大震災で大阪に避難。直木三十五と共に大衆向け雑誌『苦楽』編集。大正15年（1926）帰京、小説や戯曲を書く。

『愛染かつら』（昭和13年、田中絹代・上原謙主演で映画化。流行歌にもなり人気を博す）。昭和21年（1947）大映の製作担当専務。昭和35年（1960）同取締役。毎日演劇賞（1959）・菊池寛賞（1963）・吉川英治文学賞（1969）など、演劇・大衆文学に寄与。昭和48年（1973）文化功労賞授与。昭和60年（1985）没。

『蛇姫様』は、川口松太郎が芳賀町時代に見聞した、なすから地域の伝承文芸を生かして小説にしたと言えよう。龍門の滝に伝わる民話も素材として生かされている。小説家たちが、地域の伝承文芸を創作に生かしていた時代があった。



龍門の滝（滝）

【なすから地域の文化誌を語る伝承文芸】

古代東山道駅路が通っていた南那須地区には、長者が平伝説・桜観音伝説が、中世那須氏の拠点とされた烏山地区には、八溝山の岩嶽丸退治に結びついた蜂の恩返し伝説や佐竹氏と那須氏の相克を語る伝承文芸が残る。

他にも、藤冠森（巨木伝説）や大桶の溜池伝説、あるいは、師走八日に結びつけて語る千本騒動や師走朔日の川浸りを語る民話など、年中行事から生まれた伝承文芸も残る。

那須烏山市の自然景観や歴史・文化風土が、口承・書承相渡る豊かな伝承文芸を生み育んできた。参考文献：那須烏山市観光協会。2017.『那須烏山の民話』。

【漁労文化を生み出した那珂川の流れ】

那珂川は、栃木県と福島県境に連なる那須連山に水源域を持ち、那須扇状地から八溝山地の西麓、さらに八溝山地を横切って茨城県で太平洋に注ぐ全長150km、栃木県内だけでも余笹川、箒川、武茂川、荒川などの支流を持つ流域面積は約3,270km²の河川である。

那珂川では、アユ、サケ、ウナギ、アイソ（和名ウグイ）、マス（和名サクラマス）、サイ（和名ニゴイ）、カニ（和名モクズカニ）を対象とした漁が昔から盛んである。これらの漁は趣味とした者ばかりでなく、現金収入源とする漁師も多い。また、烏山や小川、黒羽などには、川魚専門の魚屋や魚料理を取り扱う業者も多く、さらには漁舟を作る舟大工や各種ヤスやサケを引っかける鉤を作る鍛冶屋の存在も目立つ。那珂川には他の河川には見られない独特の伝統的な漁労文化が息づく。

こうした伝統的な漁労文化を促してきたのは、何よりも栃木県内の那珂川では、50種あまりの魚類が確認されているという魚種の豊富さであり絶対量の多さである。そしてこれら魚種の豊富さ、絶対量の多さを支えているのが、流域の豊かな山林がもたらす那珂川の水量の季節的変化の少なさ、水質の良さである。

【魚族別にみた主な漁法】

(1) アユの魚堰漁

アユは、日本を代表する川魚であり、那珂川はつとにアユの生息する川として知られる。2～3月頃より那珂川を遡上し始め、川底の石に生育する珪藻類・らん藻類を主な食べ物として成長し、9月下旬頃から産卵のために川を下る。

魚堰漁は、産卵のために川を下るアユを捕えるもので縄張りともいう。漁の時期は、秋彼岸過ぎから11月中旬頃である。川の中に1間(180cm)から9尺(270cm)間隔で杭を打ち、その杭に荒縄を張り、下部に笹の葉を丸めて沈める。下って

きたアユがこの縄張りに驚いて川岸に集まったところを堰の下流側から投網でとらえる。魚堰漁は、何人かが仲間を組む、堰の設置は仲間全員で行い、網を打つ場所は毎日交替する。



那須烏山市野上

(2) アイソの瀬川漁

アイソとはウグイのことである。生息範囲が広く、那珂川下流から上流まで広い範囲に渡って見られる。アユやサケ、サクラマスのように季節的に海と川を移動することがない。繁殖力が高く生息数が多く、那珂川では最も一般的な魚である。

瀬川漁は、アイソが春先瀬に群集し産卵する習性を利用したもので、人工的に産卵場となる瀬を作り、そこに産卵のために群がるアイソを投網で捕えるもので瀬付き漁ともいう。単独で行う場合が多い。この漁は、瀬の作り具合次第で、良好な瀬の場合、設置すると翌日にはアイソがつくという。



那珂川町久那瀬

(3) サケの火振り漁

サケは、10月頃～12月頃に産卵し、約50日ほどで稚魚となり春先に海に下る。4年後、親サケに成長し再び生まれた川に戻り産卵。那珂川は、本州の太平洋側では、サケが遡る川として知られる。

サケの火振り漁は、夜間、動きが鈍くなったサケを船の舳先に取り付けた照明で川面を照らして探し出し大型のヤスで突く方法である。現在はバッテリーの電気を使用するが、古くは鉄製の籠に入れた薪を燃やしその明かりを利用したもので籠が振れることから火振りの名がついた。サケの火振り漁は、同じ那珂川でも茨城県側は禁漁であり、栃木県ならではのサケ漁である。



那須烏山市野上

(4) ウナギ^{うけりょう}釜漁

ウナギは、海で生まれ春から初夏の夜間に川を遡り、成熟した親ウナギは秋に川を下り熱帯の太平洋の深海で産卵する。夜行性で昼間は大きな石の隙間や土穴、泥の中に潜み夜に泳ぎ回り貝類、水生昆虫、小魚、カニやエビなどを食べる。肉質が美味で、多くかば焼きにされ川魚の中では最も喜ばれる。

漁の時期は、アユ漁の時期と同じで初夏～秋であるが、那珂川では烏山の山あげ、月遅れの盆の頃が最盛期となる。

漁の方法は、カエリが二つついた独特の^{うけ}釜で捕える。川漁師の場合、舟に30本から50本ほどの釜を積み込み、夜間仕掛け翌朝引き上げる。餌としミミズを用いる場合が多いが、小型のアユを用いる場合もある。



那須烏山市谷浅見

(5) カニ釜漁

ここで言うカニとはモクズカニのことで、ハサミのある脚に長い毛が生える。川に生息する最大のカニである。カニは夏の終わり頃から那珂川を遡り、秋の終わり頃から冬にかけてメス・オスとも産卵のために海へ下る。

漁の方法は、川岸に下流に向かってハの字型に^す簀を設置。その先端に篠竹で編んだ長さ約210cm口の幅約150cmの直の大型の釜を仕掛け、夜間川を下るカニをとらえるものである。



那珂川町久那瀬 武茂川

【川漁師の暮らし 青木泉氏の場合】

青木氏は昭和4年生まれ。父の後を継ぎ茂木町竹原の那珂川畔の家を拠点にし、平成20年81歳で引退するまで漁師一筋に生きた那珂川筋きっての漁師である。

青木氏のおもな現金収入源は、春のアイソの瀬川漁、夏から秋にかけてのアユの投網漁、同じ夏から秋にかけてのウナギ釜漁である。道具はヤスやサケ鉤以外ほとんど手作りであり、冬の漁が暇な時に網や釜づくりに専念した。捕えた魚の販売は、烏山の川魚店が買いに来ることもあったが、4月の瀬川漁の時期はアイソの塩焼き、夏場はアユの塩焼きやウナギのかば焼きを求めた個人客が多かったという。

川漁師の青木氏は、漁にまつわる儀礼も欠かさなかった。1月2日は仕事始めで、ニゴイをヤスで突き神棚に供えた。6月1日のアユ漁の解禁日は、アユ漁の無事と豊漁を祈り、朝食に白米飯と煮しめとお神酒をいただいた。8月20日の水神様には、那須烏山市川堀の水神様に漁の安全と豊漁をお参りし、その日の晩は自宅で煮しめなど多少のご馳走とお神酒をいただいたという。

【鳥山和紙漉きの由来・歴史】

那須烏山の伝統産業および特産物と言えは和紙漉きと葉煙草栽培である。ともに今は昔ほどの生産力はないが、紙漉きは江戸時代から第二次世界大戦前、葉煙草にあつては江戸時代から昭和40年頃まで那須烏山の経済を支えた。

烏山で和紙漉きが始まったのは、建保年間(1213～1219)に那須十郎が向田村で越前(福井県)より奉書紙(楮を原料とした厚手の紙)を漉く者を雇い入れ那須奉書を漉いたのが始まりとされる。しかしこれは言い伝えであり、このことを伝える明確な資料はない。

このように烏山和紙の由来については不確かであるが、室町地代後期には紙漉きが行われていたようである。というのも江戸時代初期寛永15年(1638)、俳諧師松井重頼が著した『毛吹草』という本に、下野国の特産物として「那須大方紙」等が記されているからである。

【鳥山和紙の隆盛と江戸商人の活躍】

さて、『毛吹草』に烏山和紙が記されていたが、著者の松井重頼が烏山和紙を知っていたからであり、それだけ烏山和紙が江戸市中において知られていたからである。それは当時烏山地方で和紙漉きが盛んに行われ、大消費地江戸で烏山和紙が流通していたということでもある。

17世紀後半、烏山藩は楮の本数により年貢を、紙漉き人や紙舟(漉槽)ならびに楮およびその売買にかかわる者に運上金うんじょうきんという税を課し、銭か現物の紙を納入させていた。また、興野村の『萬留書覚帳』には延宝8年(1680)に紙舟(槽)役(江戸時代、紙舟の数に応じて課した税)の改定があり、紙舟役が1人あたり350文と改められたとある。盛んになりつつあった紙漉きに対し、藩は税金を課し、あるいは値上げをして藩の税収にあてていたのである。

一方、興野村の先の延宝8年(1680)の記録には、興野村には業者28人、紙舟台数25艘とある。また、

元禄16年(1703)、『酒主村諸色指出帳』さかぬしむらによれば酒主村(江戸時代、烏山の町人が住む町を酒主村といった。)には、江戸紙商人問屋をはじめ紙商人、紙売買宿等の紙漉きに関わる者が28人住んでいたと記されている。

ともあれ、江戸時代、烏山藩領内では製紙に関わる者が多く特に烏山、向田村および那珂川東の興野村、大木須村、下境村、上境村、野上村、向田村等八溝山間地の村が多かった。

ところで烏山藩内の紙漉きは、農民による農閑期の副業として行われた。一方、紙の売買には、烏山城下の商人や江戸の紙問屋や商人が活躍した。中でも江戸の紙問屋や商人の活躍が目覚ましく、貞享2年(1685)、江戸の紙商人が滝太平寺に石段を寄進。明和5年(1768)、江戸紙仲間4人が宮原八幡宮へ石灯籠を寄進したこと等は、江戸商人の活躍を今に伝えるものである。



江戸紙商人が寄進した宮原八幡宮境内の石灯籠

【明治期以降の紙の生産と衰退】

江戸時代、烏山近辺で盛んに和紙が生産された主な理由は、紙の大消費地である江戸に近いこと、山間地にあり葉煙草栽培などを除くと農業が不振で現金収入を特産物の生産に頼らざるを得なかったことなどがある。

ところが明治時期に入ると、幕末から続いた和紙生産の隆盛を良いことに紙の粗製乱造の傾向が

見られ販売不振に陥った。一方、欧米からの木材パルプを原料として機械で漉くいわゆる西洋紙が導入されると烏山和紙生産は、次第に衰退に向かった。こうした烏山和紙生産衰退に対し、栃木県は和紙生産奨励のため、向田村の樋山民弥、県会議員の塚田峯三郎を岐阜県や高知県へ派遣、あるいは高知県から製紙家を講師として招き技術指導を行い、さらには有力者等が製紙伝習所を設立するなど対策がとられたが効果は上がらなかった。それでも明治38年頃には烏山地内（当時の烏山町、境村、七合村）だけでも原料売買業者29軒、製紙売買業者33軒、製造業者（紙漉き農家）367軒を数えた。それが大正12年（1923）には製造業者が半減した。そして昭和35年（1960）には和紙製業者は福田製紙所のみ1軒となり現在に続く。

【烏山和紙を代表する程村紙】

烏山和紙を代表する紙に程村紙がある。昭和52年（1977）年、国の記録作成を講ずべき無形文化財に選択された。選択理由は那須楮を原料とし、半流しと称する独自の漉き方で漉かれた紙で、強靱であるとともに品格のある美しさを保持しており、より厚く緻密な紙肌をもった独自の特色を發揮しているからという。

程村の名は、那須烏山市境字程村（現在字名は卯の木）で初めて漉かれたことによる。程村紙の用途は厚さによって異なる。最も厚いものは薬種袋に用いられ、薄くなるに従い藩主が使う御用紙や藩の役所の公用紙、さらには呉服反物包装紙、菜種袋、大福帳用紙や傘用紙に用いられた。変わったところでは、明治34年から大正14年にかけて用いられた衆議院選挙投票用紙がある。

衆議院選挙投票用紙に用いられ活気を呈した程村紙生産ではあったが、改良紙漉き法の普及により、厚手で半溜漉き法による程村紙の生産は次第に衰退した。現在、福田製紙所で卒業証書や木版画用紙、あるいは押絵等の用紙として程村紙の生産が受け継がれている。

【下境における紙漉き】

烏山和紙の一大生産地であった下境における昭和初期頃の紙漉きについて述べたい。

烏山和紙の主たる原料は楮であり、補助材としてトロロアオイがある。楮は冬季に刈り取り、長さ3尺（約90cm）に裁断したものを、蒸し器に入れ蒸してから皮を剥ぎとり、さらに表面の黒皮を小刀等で取り除いたものを用いる。トロロアオイは、つぶした根からにじみ出る汁をネリとし用いるものである。

紙漉きは、まず、楮を釜で煮て繊維を柔らかくする。次に塵取りと言ひ、繊維についた塵や傷を取る。その後、紙打ちと言ひ、台の上に塵を取り除いた楮を置き、棒でよく叩き繊維をほぐす。これを漉き槽に入れ水を加え、さらにネリを入れてよくかき混ぜる。かき混ぜたところを簾を取り付けた桁ですくい取り、それを板の上に並べ圧縮し水気を取り除く。水気が取り除かれたものを1枚ずつ紙干し板に張り付け天日で乾燥させると出来上がる。

なお、福田製紙所は、もと薪炭業ならびに烏山和紙の販売業を営んでいたが、紙漉き農家が激減したことにより自ら紙漉きを営み、販売するようになった家である。



福田製紙所福田長弘氏による程村紙の紙漉き

栃木県産の石材としては、大谷石がよく知られている。浮石質^{ふせき}ガラスや斜長石、石英を主体とした軽石質^{ぎょうかいがん}凝灰岩である。日本地質学会が、2016年に各都道府県を代表する石（岩石、鉱物、化石の3種）を「県の石」として選定した際に、栃木県の石（岩石）として大谷石が指定された。大谷石は、東北日本の大半が海中にあった新生代新第三紀中新世の中期に、火山から噴出された火山灰や軽石^{ふんしゅつ}などからなる堆積岩^{たいせきがん}である。

栃木県内には大谷石のほかにも中新世の地層から産出する石材が多数あり、それぞれ産地の名を取って長岡石、徳次郎石、深岩石、岩舟石、茂木石などと呼ばれている。

なすから地域にも、中新世の地層から産出する凝灰岩を石材として採掘していた痕跡がみられる。中山地区の中山石、熊田地区の井上石、月次地区の月次石などである。これらは大谷石と同様に、軽くて軟らかいため加工しやすく、耐火性・防湿性に優れた石材である。



石材採石跡地

北から中山石、井上石、月次石の採石跡地

なすから地域には中新世前期の中川層群と中新世中期～後期の荒川層群が分布する。中川層群は中新世前期の火山岩類を主体とした陸成層で、元古沢層^{もとこざわそう}、山内層^{やまのうちそう}、茂木層から構成される。荒川層群は海進から海退までの一連の堆積物からなる海成層で、凝灰岩と砂岩を主体とする小埦層、泥岩を主体とする大金層^{けいそうしつていがん}、珪藻質泥岩を主体とする田野倉層、砂岩を主体とする入江野層からなる。

なすから地域で石材としてよく利用されていたのは、荒川層群小埦層の凝灰岩である。共に小規模露出であり、また手堀作業であったため、生産量は多くなかった。石材は主に近隣で竈^{かまど}や礎石^{そせき}、外壁などに利用された。ガスや電気の普及により竈が減ったこと、機械掘りを早くから導入した大谷石の流通が増えたことなどから、なすから地域の石材採掘は昭和30年代に姿を消した。

【中山石】

那須烏山市中山地区周辺に分布する小埦層下部の細粒の軽石凝灰岩である。

那須烏山市中山の星宮神社および松山工業の敷地などに、やや黄色味があった灰白色の軽石凝灰岩が露出する。松山工業敷地内には坑道跡が残っている。坑道は、その側方や下方は埋め戻されているが、幅約8m、高さ約3mの坑道入口は現存している。ここでは、太平洋戦争終戦後から昭和30年頃まで、採石を行っていた。星宮神社の社殿はかつて丘陵地の上部にあったが、採石に伴い現在の場所に下した。



星宮神社と中山石の地層

中山石の採石跡に社殿が設けられた。社殿の裏の白い崖が中山石の地層。

昭和26～27年に採石に携わっていた大山賢一氏（栃木県立烏山高等学校第20代校長）からの聞き取り調査を以下に示す。当初は日給50円（この頃はラーメン1杯20円）の雑用係として、資材準備

や採掘道具の焼き入れのためのふいご操作などを毎朝行った。採掘で用いるツルハシの^{まもう}摩耗は激しく、毎朝、焼き入れで先端を鋭く^{たた}敲击直していた。完全に消耗した際には、^{はがね}鋼を取り付けてもらうため、自転車で旧湯津上村光丸の^{かじや}鍛冶屋に行った。その後は出来高払いの採石の^{うけおい}常用請負となり、平均して日給200円程度稼いだ。中山石は、主に^{かせ}竈の石材として近隣で用いられたほか、灰屋やタバコの葉の乾燥小屋、納屋の礎石などで用いられた。



中山石で造られた石蔵

終戦後、東京の仲買人が東京都江東区の倉庫の建材として利用するため、中山地区在住の石山の親方に、中山石の採石を依頼した。採石は親方以外に常用請負3名程度による手掘りであった。採石現場はいずれも北側の山体で、^{こうどう}坑道入口は南にあったので、坑内の明り取りは自然光だけで十分であった。坑内は上部からも下部からも水が湧き出すため、ポンプでくみ上げ、竹を組んだ水路で排水していた。時折、直径50~100cm程度の球状の固い石（これを“ガラス玉”と呼んでいた）にあたることもあった。その際は、親方と請負総出で除去作業を行った。除去されたガラス玉のいくつかは、松山工業の植え込みに残っている。石材としては6寸×10寸サイズの注文が多かった。掘り出し後の成形で失敗したものは5寸×10寸に回すこともあった。採石作業は、成形を考慮し受注したサイズの厚み（5寸または6寸）よりも厚めに幅数cmの溝を縦横に刻んだ。溝ができたら石をはぎ取るために、底面に5~6か所くさびを入れる。これを徐々に打ち込んで^{きざ}はぎ取っていく。ツルハシは両端が鋭くなっているが、細い溝を刻んでいくため摩耗は早く、毎日の焼き入れは不可欠であった。

【井上石】

那須烏山市熊田の井上地区に分布する小埜層上部の^{そりゅう}軽石質凝灰岩である。中山石に比べ粗粒で、砂混じりでもある。

昭和30年頃まで、同じ熊田地区にあった石材店が採石を行っていた。近隣の民家で竈や物置小屋などの礎石や外壁などに利用していた。



井上石の採掘跡



井上石を用いた納屋

【月次石】

那須烏山市月次を流れる江川より東方の丘陵部に分布する小埜層上部の軽石質凝灰岩である。井上石もこの丘陵部にあり、ほぼ同じ地層である。井上石と月次石は採石場所が違うだけで、同じ石である。

【田野倉の七輪】

荒川層群の田野倉層は、植物性プランクトンの珪藻の殻が海底に降り積もってできた珪藻質泥岩を主体とする。珪藻質泥岩は濡れると緑色、乾くと白色を呈する。きめが細かく、とても軽い岩石である。かつては、この田野倉層の珪藻質泥岩で^{しちりん}七輪を作っていた。

4

なすからの農業

那珂川や荒川沿いなどの低地では、稲作が盛んに行われている。川から離れた平地でも、これらの河川からポンプでくみ上げた水や、丘陵から湧き出る水を水田に利用している。水田開発のために、河川の流路を人工的に変更する「川廻し」や、地下に隧道を掘削し水路を作るなどされてきた。

那珂川以西の丘陵は水の通りがよい砂礫層が主体で、かつては葉タバコの栽培が盛んであった。現在は、リンゴやナシ、ブドウなどの果樹栽培が盛んである。八溝地域の山間部は平地が狭小で、保水も困難なため、主にそばや小麦などの畑作を中心に行ってきた。



荒川の川廻し(三箇)

稲作のために、河川の流路を変えた。青は現在の河道。赤はかつての河道で、段丘崖がそびえる。

(国土地理院 CKT20151 を改変)

【棚田】

なすから地域の丘陵や山地には、谷津地形が多くみられる。低地に向かって扇状に広がるように浸食された地形である。山体に蓄えられた水は、この谷津に集まり、谷津の中を通る沢を流れ下る。谷津の中では農業用の貯水池を作ったり、階段状の田んぼである棚田を作ったりしている。

棚田は国土の狭い日本では、農山村の原風景ともいわれる。1999年に農林水産省が「日本の棚田百選」を選定した。栃木県では「国見の棚田」と、茂木町「石畑の棚田」が選定された。

国見の棚田は耕して天に至ると詠われている。

悠久の歴史を経た棚田は、そこに住む人のためまぬ努力によって維持されてきたが、高齢化や後継者不足などから、50枚ほどあった棚田の多くは荒れてしまっている。近年、市内の有機農家「帰農志塾」が中心となり、棚田が復活されつつある。



【中山かぼちゃ】

那須烏山市中山地区では、ブランド化した「中山かぼちゃ」が栽培されている。50年以上前から農家が、自家消費用に作っていたかぼちゃが由来とされている。栽培が難しく、収穫期間も短いことから流通量は少ない。皮が薄く、果肉は濃いオレンジ色できめ細かく、さつまいものようなほくほくとした食感が特徴である。

品質を維持するために種子はJAなす南管内で管理をしている。かぼちゃに貼られた生産者の顔写真入りのシールは、自信の表れである。



【国見みかん】

那須烏山市国見地区では、約50年前からみかん栽培を行っている。現在、4軒のみかん園がある

が、いずれも規模は小さく、みかん狩りをメインとした観光みかん園である。みかん自体は流通されていないが、東京の酒造会社により、完熟した果皮を用いて、その香りと自然の色合いを抽出したりキュール酒が醸造されている。日本最北限のみかん産地といわれる。

みかん栽培には、温暖な気候と水はけのよい土地が必要である。国見地区のみかん園は、北から南に向かう谷津地形の中にある。南方に開いたこの土地は日当たりがとても良い。みかんの木は斜面に植えられているので、1本1本によく日が当たる。北側の山体は北風を防ぎ、東西の山体と合わせて、温まった空気を逃さない。なすから地域で最も温暖な地域となっている。傾斜の強い谷津地形であるので、水はけもよい場所である。

八溝観光みかん園には、那須烏山市指定天然記念物のユコウの木もある。ユコウとは、ユズとダイダイの自然交雑種である。推定樹齢250年、樹高6mの古木である。



【八溝そば】

農家では、冠婚葬祭の時に自宅でそばやうどんを打ち、近隣にふるまう習慣があった。豊かな清流の水と、水はけのよい大地ではそばや小麦などが栽培されてきた。石臼のほか、河川や水路に設けられた水車にかけて粉をひいていた。

八溝地域では、在来種のそばの栽培が盛んである。八溝山系の豊かな水資源と、山間地域による寒暖の差により香り高く、甘みも感じる質の高いそばである。那須烏山市では「八溝そば」として商標登録している。

八溝地域の1市3町（那須烏山市・那珂川町・市貝町・茂木町）は、八溝そばの振興を目的とした「八溝そば街道推進協議会」を設立している。



【果樹園】

那珂川以西の丘陵地の多くは、水の通りがよい砂礫層を主体としている。丘陵頂部は概ね平坦だが、水はけがよく野菜栽培に適さない。平坦な頂部や緩い傾斜地を利用して、リンゴやナシ、ブドウ、ブルーベリー、梅などの果樹を栽培している。



丘陵平頂部から斜地にかけての果樹園（中山）



丘陵斜地の果樹園（福岡）

(1) 「ジオパーク(Geopark)」ってなに？

Geoparkは、大地を意味する「Geo」と公園を意味する「park」を組み合わせてできた造語で、大地（地質・地形）から地球の過去を知り、未来を考えて、活動する（行動する）場所である。今、見ている風景や人の営みは、地球が誕生してから約46億年で作られたもの。例えば、山や川や滝を見て、その成り立ちと仕組みに気づく（知る）と、今までなんとも思っていなかった景色が違って見えてくるはず。また、その景色が、何千万年、何億年という途方もない年月をかけてつくられてきたことを知れば、私たちの暮らしは、地球の活動なしには存在しえないことがわかる。

「ジオパークで何をするか」をザックリ3つのキーワードで語ると、「知る」「考える」「行動する」になる。（JGNのHPより一部修正）

「ジオパークの目的」にもふれる。また3つのキーワードにすると、「保全」「教育」「持続可能な開発」である。「持続可能な開発」の中には、「観光」がある。ジオパークの見所を「ジオサイト」というが、ジオサイトを訪れる「ジオツーリズム」を通して、地域が新たな収入源を生み出し、地域が自立的にそして持続的に保全や教育ができるようにする一連の仕組みである。ジオパークは、ダイナミックな地球の活動がよくわかる地質や景観が、大切に守られ、教育や持続可能な開発に活用されている地域のことでありともいえるのである。（日本のジオパーク活動リーフレットより）

「ジオパークの守るべき対象」も3つのキーワードにすると、それは「ジオ」「エコ」「ヒト」に集約される。地球上あらゆるモノは、すべて地球から生まれた地球のカケラともいえる。そのカケラを3つに分けると、「ジオ」「エコ」「ヒト」になる。「ジオ」は大地のものを中心に地層や地形や化石を対象とし、「エコ」は主にその上で生活する動植物や生態である。そして「ヒト」は人の歴史・文化・産業遺産を対象とした。（右上図参照）



ジオパークの対象と活動(JGNのHPを一部修正)

(2) 日本のジオパークと

世界ユネスコジオパークについて

2022年8月31日現在、日本には、46地域の「日本ジオパーク」があり、その中で9地域のジオパークが「世界ユネスコジオパーク」に認定されている（詳細はJGNのHPを参照）。

近隣のジオパークを紹介する。茨城県では筑波山地域、群馬県が下仁田と浅間山北麓、埼玉県が秩父、福島県が磐梯山、千葉県では銚子、東京都で伊豆大島、神奈川県で箱根がある。お気づきであろうか、本県にはまだジオパークがない。ちなみに本市と同じように「ジオパークを目指す地域」10地域も紹介する。古関東深海盆、蔵王、飛騨山脈、北九州、東三河、三好、飛騨小坂、上川中部、喜界島、そして那須烏山である。

(3) 『那須烏山ジオパーク構想』

～北関東の大地の生い立ちが学べる場所～

をジオ・エコ・ヒトで紹介

【ジオ】・大地（地層）・地形と化石

北関東は、ご存じ群馬・栃木・茨城三県。地球的に言えばご近所さんである。大地をつくっている地層にもつながりがある。真ん中の栃木県そして那須烏山市には、多くの露頭（地層が見える場所）があり、直接観察して、その積み重ねを連続的に観察することができる貴重な場所が残っている。（詳細は、那須烏山ジオパーク構想のパンフレット参照）

2023年現在、クジラやアシカのなかま、貝などの化石が



セイウチ化石記事

たくさん見つかっている。栃木県は「海なし県」であり、当然那須烏山市にもない。

しかし、この事実皆さんならどう考える？

1979年「オオガネクジラ（通称）」が発見された。約1200万



オオガネクジラ発掘のようす

年前のクジラの体の多くの部分が化石となっていて残っていた。とてつもなく長い時間を超えて、私たちが生きているこの時代にその存在を見せてくれたことは奇跡である。現在その半分を栃木県立博物館が所有、常設展示を行っている。

ところで、「レッドデータブック」って、ご存知でしょうか。詳細は割愛するが、栃木県でも「絶滅のおそれのある動植物や後世に残したい地形地質」を広く知っていただくため、刊行している。那須烏山市内の地形地質から代表的なものを、また次の【エコ】で動植物を紹介する。

地形地質では、川がつくったものが特徴的である。わかりやすいのが、「龍門の滝」であるが、これは当面は大きな変化はない。しかし、確実に毎日の風化・侵食により変化していることは事実である。

次に変わったものでは、川の蛇行である。川が蛇のように曲がって流れているもので、特に那須烏山のものは「穿入蛇行」とよばれている。荒川や那珂川で見られる。



荒川の蛇行のようす(岩子上空より)

【エコ】・動植物や生態

植物からは、2006年に新種として発表された「シ

モツケコウホネ」である。生息しているのは日本で、日光市と那須烏山市、そしてさくら市と真岡市の4地域のみである。個体数で言うならば、那須烏山の個体数は、佐渡の「トキ」よりも少ない18個体であると発表されている。他にも国見地区には、ミカン栽培の北限といわれている



下川井のシモツケコウホネ

「国見のみかん」

や最終氷期の生き残りだと考えられている「株立ちのブナ」がある。また、市内各地に残る「ホタルの生息地」や那珂川の鮎とその漁法である「やな」も守るべき貴重なものである。

【ヒト】・遺跡や城、お祭りや産業

那須烏山市には、たくさんの遺跡がある。ここでは代表例をひとつだけ紹介する。

【古墳時代の横穴墓】

那須烏山市には、たくさんの横穴墓がある。穴のまわりの地層をよく見ると、どの穴も似ている地層である。那須烏山が海だった時代にできたその地層は、比較的柔らかく、崩れにくいという特徴がある。古墳時代の人々はその地層の特徴を知っていたのであろう。

(4) 那須烏山ジオパーク構想のこれから・・・

栃木県で最初のジオパークを目指そうと、先頭を走ってきた。しかし、コロナ時代を経験し、その活動も分岐点にさしかかっている。2023年は、栃木県や八溝地域そして那須烏山市において、大きな転換点になるのではないだろうか。

今後、最も発展的で希望に満ちた道を選択していければという思いである。それは、単独ではない「広域ジオパーク」の実現に他ならない。

- 日本の地質「関東地方」編集委員会(編). 1986. 『日本の地質 3 関東地方』. 共立出版.
- 栃木県立博物館研究紀要
- No.6 小倉洋志・八板美智夫. 1989. 栃木県南那須町におけるブナの分布.
- No.9 八板美智夫・小倉洋志. 1992. 栃木県南那須町北西部の植物相.
- No.31 青島陸治. 2014. 龍門の滝はいかに生じたか.
- No.31 柏村勇二・松居誠一郎. 2014. 栃木県烏山地域における中部中新統大金層の貝化石群集.
- No.32 星 康彦. 2015. 那須烏山ジオパーク構想－栃木県立博物館との連携から－.
- 栃木県立博物館 研究報告書 5. 1987. 『八溝の自然(Ⅰ)』. 栃木県立博物館.
- 栃木県立博物館、企画展図録. 1986. 『八溝の自然』. 栃木県立博物館企画展図録.
- 栃木県自然環境調査研究会 栃木県林務部自然環境課
- 鳥類部会(編). 2001. 『とちぎの鳥類：栃木県自然環境基礎調査 2001』.
- 土壤動物部会(編). 2002. 『とちぎの土壤生物：栃木県自然環境基礎調査 2002』.
- 哺乳類部会(編). 2002. 『とちぎの哺乳類：栃木県自然環境基礎調査 2002』.
- 植物群落部会(編). 2002. 『とちぎの植生(植物群落)：栃木県自然環境基礎調査 2002』.
- 昆虫部会(編). 2003. 『とちぎの昆虫Ⅰ：栃木県自然環境基礎調査 2003』.
- 昆虫部会(編). 2003. 『とちぎの昆虫Ⅱ：栃木県自然環境基礎調査 2003』.
- 植物部会(編). 2003. 『とちぎの植物：栃木県自然環境基礎調査 2003』.
- 南那須町自然環境調査研究会(編). 1995. 『南那須町希少樹木調査報告書』.
- 南那須町教育委員会生涯学習課文化係(編). 1998. 『南那須町の植物 第3集(シダ植物)』.
- とちぎの化石図鑑編集委員会. 2014. 『とちぎの化石図鑑』. 随想舎.
- 那須烏山市教育委員会
- 文化振興課. 2015. 『那須烏山市の文化財』.
- 木本雅康. 2014. 古代の駅家. 『長者ヶ平官衙遺跡附東山道跡国史跡指定5周年記念講演会資料 古代の道路と駅家』.
- 木下 実. 2007. 『東山道駅路発掘調査報告書』.
- 烏山和紙「程村紙」調査委員会. 2014. 『程村紙調査報告書』.
- 栃木県考古学会(編). 2016. 『とちぎを掘る－栃木の考古学の到達点』. 随想舎.
- 中山晋・藤田直也. 2004. 下野国. 『日本古代道路事典』. 八木書店.
- 板橋正幸他. 2007. 『長者ヶ平遺跡』. 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
- 木曾武元. 1733. 『那須拾遺記』 私家版.
- 木本雅康. 1993. 下野国の古代伝路について. 『交通史研究』 第30号. 交通史研究会.
- 大塚悠暉・高橋修. 2022. 室町期茂木家の苦悩－茂木城合戦とその前後－. 高橋修(編) 『戦う茂木一族』. 高志書院.
- 那須烏山市観光協会. 2017. 『那須烏山の民話』.
- 柏村祐司. 2012. 『栃木の祭り』. 随想舎.
- 柏村祐司・下野民話の会(編). 2015. 『新 語りべが書いた下野の民話』. 随想舎.
- 柏村祐司. 2021. 『下野の雷さまをめぐる民俗』. 随想舎.

■執筆者一覧

- 青島睦治 (栃木県立博物館名誉学芸員)
飯塚真史 (栃木県立博物館特別研究員)
石下翔子 (那須烏山市生涯学習課学芸員主任)
上野修一 (なす風土記の丘湯津上資料館長)
江守浩史 (那須烏山市生涯学習課課長補佐)
柏村祐司 (栃木県立博物館名誉学芸員)
柏村勇二 (栃木県立博物館名誉学芸員)
吉川和穂 (那須烏山市生涯学習課主事)
木下 実 (日本考古学協会会員)
木村康夫 (那須烏山市文化財保護審議会副会長)
小峯洋一 (那須烏山市生涯学習課主幹兼総括)
酒井豊三郎 (宇都宮大学名誉教授)
重藤智彬 (那須与一伝承館学芸員)
眞保昌弘 (国士館大学教授)
鈴木志野 (なす風土記の丘湯津上資料館学芸員)
鈴木芳英 (那須烏山市生涯学習課学芸員係長)
常盤祐哉 (那須烏山市生涯学習課主事)
松本将樹 (那須烏山市観光ガイド理事)
山川千博 (大田原市文化振興課学芸員)
星 康彦 (なすからジオの会プチェーロ代表)

令和5年2月15日 発行

編 集 なすからジオの会プチェーロ
 〒321-0633 那須烏山市滝25

発 行 那須烏山市教育委員会生涯学習課
 〒321-0595 那須烏山市大金240
 電話 0287-88-6223

